

園芸療法旅日記

HIROBO



ナイアガラ（カナダ）



人は旅に出て
自分をとりのどす
出会い とまどい 冒険 発見

この旅日誌は、二〇〇九年九月八日から一七日にかけて、アメリカとカナダの園芸療法を中心にした医療保険福祉事情を、等身大で見てまわるスタディツアーの番外記録である。

それは、二〇世紀最後の年が明け、まだ梅の花もほころびぬ季節だった。菅由美子から、アメリカとカナダの園芸療法を見てまわるツアーをもちかけられたけど、いっしょにいくのなら引き受けたいと話があった。突然の話だった。だけどわれらKAN・KANコンビ（菅由美子と山根 寛の管と寛）は、興味があるものには、たとえその正体がわからなくても、いやわからないほど興味を抱く怖いもの知らず。新しいものは見てみよう、知らないものは食べてみよう、都合の悪いことは忘れてしまえ、という幼児力と老人力のかたまりのようなコンビなのだ。

そんなKAN・KANコンビにとって、園芸療法スタディツアーは、どこで時間を都合つけるかという問題でしかなかった。最近また〇〇療法という定義の不確かな療法が増えてきている。この際、園芸を通してアメリカのリハビリテーション事情を、ユーザーの視点から見えてまわるのもいいだろう。医療スタッフとしていくより、アメリカの本音がみえるかもしれないと、二つ返事で引き受けた。

内容が決まりはじめたのは端午の節句の季節、忙しさにすっかり忘れかけていた頃。市民を巻き込んだ小さな芽生えのような活動から、医療、福祉とピンキリ見比べようと、菅がアメリカの園芸療法仲間を通して折衝した。時期は九月、一五人くらい、一〇日間で一〇カ所。

ところが、七月、僕は思わぬ災難で重傷の椎間板ヘルニアになり、三〜四週間はまともに寝起きもできない状態になってしまった。最初の医者は「いやーすごいヘルニアですね、痛いでしょう」と、笑いをこらえるかのようにうれしそうにいい、即入院、即手術を勧めた。しかしサードオピニオンで、これほど立派な重傷例は、痛みを辛抱し、コルセットで固定すれば、飛び出た椎間板は分解吸収され、手術より予後がよいという最近の知見を知った。こういう場合は、都合のよいほうを選ばなくてはいけない。それから、できるだけ遠出の仕事をキャンセルし（実際、動けなかった）、寝ながらパソコン状態で仕事を片づける日が続いた。

ツアー募集がはじまる。反響は大きいものの、臨床の作業療法士たちは、お金の都合はついていても、直接作業療法と関連のないことで一〇日間も病院を休むわけにはいかないという。園芸療法をおこなっている人たちは、興味はあるけど、みんな園芸で定職に就けていない人たちがおおく、時間はあっても先立つものがという。少しでも経費を少なくと、菅が通訳兼添乗員、添乗員補佐を参加者の一人に頼むという努力をして、募集定員を割るが、総勢一名でツアー決行が決まった。結果的には、臨床の場をめぐり、実際にセッションに加わり、当事者ともかかわることになるこのツアーにとっては、この人数は最適な小グループであった。

そして、九月に入り、まだ右足にしびれや鈍痛は残っているものの、コルセットと杖歩行で、階段昇降も可能になった。ここからはもうアメリカ。ヘルニアは気を引き締めよという天のお告げだったのかもしれない。

園芸療法旅日誌（園芸療法スタディツアー番外編）
目次

プロフィール

成田発シカゴ・オールバニー

初顔合わせ

最初の失敗

フォアグラ的生活

おーボディール

ハグハグ、ボディール

発憤日米老人パワー

地域に芽吹く小さな畑

夜のサラトガ

ナイトセミナー

名コックカレンの歓迎

スーパード、スーパード

朝からレクチャー

カレンはコック

爆走ボディール

アメリカの精神保健

おーマナー

22 21 19 18 17 16 15 13 12 11 9 8 7 5 4 2 1

一二回で終わるデイケア
レスキュードック 23
花開くフライドオニオン 24
サバイバルアーティスト 25
荷物はどこ? 26
ドライバーはドラキュラの親戚 27
オイーエー恋を語る 27
アメリカの医療 29
すばらしい環境 30
園芸療法士の悩み 31
作業療法をする 31
ここでもマネージドケア 33
ピザパーティー 34
緑の殿堂□ングウッドガーデン 35
特別チップさよならパーティー 36
ハンドベルの響き 37
ハイビーワイビーワイ 38
有機の工夫は勇気がいる 39
アンコールハンドベル 40

40 39 38 37 36 35 34 33 31 31 30 29 27 27 26 25 24 23 23

質実敬虔なクエーカーのホーム 41
フィッデルフィアエアポートの難 42
さあトロントへ 43
カナダの医療 45
緑のなかの城 46
整った施設とプログラム 46
園芸療法セッション体験 48
歓迎ランチ 49
ミッチェルのレクチャー 49
セントジョセフ 51
カナダの和食を試そう 51
ホテルグッズの新利用法 52
ナイアガラ 55
花時計 56
カナダ式民宿 57
あこがれのナイアガラ 57
カナダ園芸学校 59
チャイナタウン 59
トロントの地下鉄 60

60 59 59 57 57 56 55 52 51 51 49 49 48 46 46 45 43 42 41

| | |
|-----------------------------|-----|
| ホテルでドリアン | 61 |
| トロント発シカゴ・成田 | 63 |
| おにぎりをもって空港へ | 64 |
| 三度目のシカゴ | 64 |
| 成田へ | 65 |
| 旅の終わり | 65 |
| ツアーメンバーの感想 | 67 |
| 私の癒し(新国正明) | 68 |
| 風土とTherapeutic Garden(松本正美) | 71 |
| 園芸療法視察研修を終えて(寺内桂子) | 79 |
| 新たな自信と確信の旅(腰原菊恵) | 86 |
| ほんやりと感じる方向性(森田美穂) | 92 |
| 広い大地と豊かな森で(屋良節子) | 98 |
| 次はフロリダへと夢馳せる(嶺井毅) | 99 |
| 睡魔と戦ったハードツアー(伊藤孝子) | 100 |
| 目指した道の確認(尾家康夫) | 101 |

成田発シカゴ・オールバニー（二〇〇〇年九月八日空路シカゴ経由でオールバニーへ）

僕はいつもの旅のように、旅の常備薬正露丸、洗濯物を干すためのパラシュートロープ、そしてツールナイフをバックに入れた。それぞれどれも、中国の田舎や、タイの山のなか、ガンジス川のほとり、グアムの海岸、南の島々で僕を助けてくれたモノばかりだ。

これまでのアジアや南の島々への旅と違う所持品といえば、蚊取り線香の代わりに記録用のデジタルカメラが入っていたことだろうか。

本当にその足腰（七月にヘルニアになり、コルセットと杖歩行）でアメリカ・カナダに行くのかとみんなに心配されながら、新幹線と成田エクスプレスを乗り継いで空港へ。

初顔合わせ

一一時一五分、新東京国際空港第一ターミナルビル、出発ロビー。今回のスタディツアー全員がはじめて顔を合わせる。

リバイエイ・インターナショナルの小山さんと川口さんに案内され、一同、空港の説明用の部屋に集合。僕たちの旅の説明用には立派すぎる部屋だ。これからの旅への期待と不安のなかで、お互いの自己紹介をする。

ニューカントリー：退職して自遊人になった、元校長先生の新国正明。校長先生だった人が、訪問先で「アイアムニューカントリー」と自己紹介をはじめると、誰が想像しただろうか。新しい世界、新しい人とのかわりを求めて人生の旅をはじめた自遊人。

オーイーエー：九州で知的障害者の福祉施設を運営している、本当はとってもシャイな尾家康夫。初めてみる人は、そのアチラの関係の方のような顔つきに一瞬身構える。この見かけのおかげで、本人は誤解されたかも

しれないが、みんなは旅の間ずいぶん助かったような気がする。「オーノー、私はオーイエース」？。
 ハカセ：製菓会社の菓草部門に勤務する、少年のようななげりのない好奇心をもった松本正美。後にその植物に対する博学から、ハカセと呼ばれるようになるが、植物の群生をみるとうれしさああまりに踊り出すという奇癖がある。その優秀な頭脳から生まれる松本ギヤグは、オヤジギヤグの高品位亜種。

ツヨシ：沖縄の精神病院で作業療法士としてはたらき、園芸活動もおこなっている嶺井 毅。沖縄作業療法士界の静かな右腕。アメリカで作業療法士の資格を取り、今回のツアーでもその経験に皆助けられた。日本語で話すより、英語で話すほうが流ちょう。

フチヨーまたはセツコサン：嶺井君と同じ病院で総婦長をしている屋良節子、「アツハハ：ハハハツ：ハハツハッハ」その笑いカワセミのような明るく大きな笑い声。飛行機のなか、バスのなか、ホテルをとわず響き渡る。どんなに疲れたときでも、その笑い声がみんなを元気づけてくれた。

タカコ：長野県の病院で働く優秀な作業療法士、伊藤孝子。自己紹介のときは小さな声で物静かな印象を与えていた。わたし言いたいことが言えなくてというが、旅が進むにつれ、解放、開放、大カイホー。イーケ、イーケ、ターカーコ。誰か私を止めて〜。

ミホ：大阪の土壤改良の会社に勤務している森田美穂。このツアーのなかでは一番若いこともあり、おとんぼう（末っ子）のような物怖じしない自由な振る舞いと笑顔でみんなのアイドル的な存在になった。頭の回転の速さ、素直さ、優しさ、好奇心を秘めている。

ケイコ：京都で造園会社の設計部長をしている寺内桂子。あれがほしいこれもほしいと思うと、疲れもどこへやら、シマリスのように元気に走り回り、帰路には疎開か買い出し部隊のように左右の振り分け荷物と両手に鞆状態。

キクチャン：京大で作業療法学科の助手をしている腰原菊恵、作業療法士。その年齢不詳な柔らかな落ちつきとどっしり（尻）感が買われ、今回は僕と管さんの監視役兼介護役。全員の食事の大蔵省まで引き受けてもらった。

ユミコ：そして、このミニツアーの仕掛け人、園芸療法に関する同行通訳兼添乗員役の管由美子。立っているのか倒れるのかわからない酔拳の達人風味の、ひとをハラハラさせる動きをする。アメリカで園芸療法の資格を取り、すでに二度研修ツアーの経験があり、見かけとはうらはらにタフ。

ヒロポー：それに、同行解説者という名前をもらいながら、子どものように一人で勝手に歩き回る僕、山根寛。何でも口に入れ、鼻腔粘膜と口腔粘膜で世界を確認する。あてになりそうで危ない、結果的にみんなを自立させることになる。作業療法を趣味にしている作業療法士。

ヒロポーとユミコの KAN・KAN コンビを含めて、総計一名が今回の旅の一行であった。わずか一〇日の旅、されど一〇日の旅、僕たちの行く先には、なにが待っているのだろうか。

最初の失敗

今回は、旅に先立つこと一カ月前、椎間板ヘルニアという災難にあったこともあり、必要な準備も十分ではなく、気がつけば、メモ帳も記録用のボールペンも忘れてきている。自己紹介を終え、出発までの空き時間に空港の売店で購入しようと歩き始め、空港のスナップをと思ったときに気がついた。あれ、デジタルカメラは？

さっそくの、お目付役のキクチャンの声がとぶ。

「まーったく、もうですか。しょーがないですなーセンセイは」
つけ加えて今度は、みんなを見て

「いつもこーなんですよ。だめですよ、あてにしちゃ」(ななにもそこまで言わなくても) この瞬間に、ツアーメンバーは、彼女の強力なコントロールパワーに気がついた。そして、自分たちのリーダーになるらしい僕に、一抹の不安というまなざしをむける。

そのとき、リバイター・インターナショナルの小山さん。誰かカメラ忘れていませんかと届けてくださり、恐縮赤面。ああ、先が思いやられる。活字中毒の僕は文芸ポストを、ケイコは文芸春秋かなにかを買う。機内での中毒症状予防用だ。

フオアグラ的生活

小雨のなか、ユナイテッド航空UA884便は、予定通り一四時一五分、シカゴに向けて離陸。

一六時には最初の機内食ディナー。ビーフブリスケット、マッシュルームソース、パジリコ風味のポテト、グリーンピース、スモークサーモン、ガーデンサラダ、ココナッツシヤンパンケーキ、バドワイザー、赤ワイン。メニューを書けばそれらしいが、油っぽく、甘く、塩っ辛い。成人病予備軍製造食だ。

本を読んだり、音楽を聴いていると、一七時半には夜食がでてきた。ミニカップうどん、チーズクラッカー、レモンクッキー、ソフトドリンク。オーイエーは、旅における就眠時の習慣だと、ジンジャエールのジントニツクをミニボトル三本。さらに免税店で購入したサントリー山崎八年ものをナイトキャップに、いつの間にか眠っている。

オーイエーが、夢うつつでトイレに立つ。何度目だったか、ふらふらしながら座席から立ち上がったオーイエー。熟しきった洋梨のような体型の腹が見えている。きつと息苦しさから、寝ながらベルトをはずし、ズボンのチャックをゆるめたのだろう。僕は、そつと、後ろから両手でズボンを持ち上げた。

うとうとしたり、ビデオの映画を見ていると、オーイエーの耳元で

「お客様」

とステュワーデス。

そういえば先ほど、オーイエーのウイスキーの箱が通路に転がっているのを見つけ、ステュワーデスが何か囁きあっていた。機内では免税店で購入した酒類を飲むのは禁止されている、飲みたければ私どもがいくらでも用意するので、購入したものを飲まないようにと教育的指導(効果なし)。

そうこうしている内に窓の外に町が見え始めた。二三時四〇分、着陸前の軽食がだされる。マッシュルームとチーズのラップ、サルサ、コーヒー。日付変更線を越え、時差約半日。八日の一四時すぎに日本を出発し約一〇時間、シカゴはまだ八日の正午。

UA1404便に乗り継ぎ、一四時一〇分、四五分遅れで離陸。一五時一〇分、機内食。ハンバーグ、クッキー、やけにしよっぱいポテトチップス、ソフトドリンク。相次ぐ食事で時間の感覚が崩れはじめる。一七時、オールバニー着、専用バスで宿泊先のサラトガダウンタウンモーテルへ移動。

荷物を片づけた頃、ボディール夫妻がみえ、夕食に出かける。サラトガの夜、苦みの効いたローカルビアがうまい。二〇時間の間に軽食を含めて五回食事をしたことになる、ああ、これはもうフオアグラ的生活だ。二時半、就眠。

おーボディール（九月九日、午前ボディールさん主催ウエイ・トウ・グロウ、午後バウンドビュー・フ
アームへ）

最初の宿泊先、サラトガダウンタウンモーター。サラトガの町のほぼ中央、メインストリートに面した駐車場がある、二階建てのシテイモーターだ。プールを囲むように部屋があり、毎晩、遅くまで父子やカップルが泳いでいた。僕の部屋は一階、外の駐車場側からも、モーター内のプール側からも出入りできる。

朝、フロント横においてあるコーヒーやオレンジジュースとデニッシュで朝食をすませると、バスがもう待っている。

大型の観光バスに一人。席があまりすぎて、みんなどこに座ろうかと席探しの様子。成田で自己紹介してから、飛行機のなかでは個々の席に隔離され、昨夜モーターに着いてから夕食をいっしょにしたくらい。まだお互いをよく知らない状態でのバスの着席。グループのはじまりにみられる集団内の個々の位置づけが、そのまま席に現れておもしろい。

この日の朝のバス内の席と、ツアー中になじみができはじめてからの多少の変化が、お互いのグループ内の位置づけや集団内行動パターンを表していた。

ハグハグ、ボディール

バスが研修場所ウエイ・トウ・グロウに到着する。郊外の住宅地にある瀟洒な二階建ての白い木造。ボディールと夫君のアルが待っている。さっそくのボディールハグ。巨大なマシユマロにくるまれたようなボディールハグに、ユミコは今年もうつとり。僕はさすがにまだそうした習慣になれていないので、まだ巨大マシユマロハグは遠慮する。

ウエイ・トウ・グロウは、ボディールがおこなっている園芸療法のNPO活動。今回も日本から園芸療法を学びに研修生がきていた。二階建ての事務所の一階が研修室を兼ね、一〇数人ならレクチャーが可能。二階は簡単な宿泊も可能になっていて、以前は研修生が寝泊まりしていたこともあるという。

研修初日。午前中は、ボディールの仲間のジョエルがスライドを交えながら高齢者の園芸療法に関してレクチャー。ジョエルはニュージャージー州ルトガー大学で園芸療法を担当。農業関係の学部卒業だという。

ああ、アメリカについて、最初にするのがレクチャーを受けることとは。やはりこの旅はスタディツアーなのだ。メンバー全員が気がつく。しかし、どこの大学でもそうであるように、新学期のはじめには、みんな出席してまじめに講義を受けるものだ。このまじめさはいつまで続くのか。

ジョエルの話の内容は、基本的なことがおかつた。後で何人かのメンバーから、もっとアメリカの実践と現状について聞きたかったという感想が聞かれた。さすが、我がスタディツアーのメンバー、ポイントは押さえている。

レクチャーのなかで、ジョエルが、しきりに高齢者は幼児と同じ、物事のスピードが遅く、役立たず扱いされているが、園芸は高齢者に適しているといった内容の話をする。次第に、ツアーメンバーの何人かに、なにかしっくりこないという反応がみえはじめる。

退職したばかりのニューカントリーとフチョーの腰に、少し落ちつきがなくなる。オーイーも口元がゆるんできて、きよろきよろしはじめている。ツヨシの口元も少しへの字になってきた。

ジョエルの話の間をねらい

「ジョエル、君はひとが年をとることのマイナス面ばかりを強調している。年をとるってそんなに悪いことばかりなのか。プラスの面もあるはずなのに、どう思うの」

と聞くと、ジョエルは思いがけない内容の質問に、少しとまどったのか、ボディールのほうを見やりながら、とってつけたような説明をはじめようとする。

ボディールも

「私もそう思う。私は七〇歳になるが、こうして元気だし、仕事をしている、アルだってそうよ」

「小さなことにくよくよしなくなったしね」

と僕にあわせて反撃。アルもにこにこして頷いている。そうだ、そうだ、アメリカの高齢者、もっとがんばれ。効率主義に負けるな。

すかさず、ニューカントリーが発言。

「私ね、教師をしていましたが、この春に退職して、やっと好きなことができるようになって喜んでいてんですよ。年をとり、教師という役割を負え、今自遊人なのです。この自由を楽しんでいます」

常に穏やかなニューカントリーの声が少し大きくなり、ことばの量もおおい。これは言わずにはおられないと言う気持ちの表れなのだろう。

そうだ、アメリカの高齢者も、日本の高齢者も、もっと言ってやれ、示してやれ、老人パワーを。中古車のように人間を扱う思想こそエイジズムだ。後でジョエルに、エイジズムということに象徴される、平均的なアメリカ人が抱いているキーワードは何かと訪ねると

「することがのろい、邪魔者、役立たず、汚い」
だという。

アメリカ全体がそうではないのだろうが、力ですべてをコントロールし、大量生産、大量消費を繰り返すことで成長してきた、歴史の新しい若い国、移住し、時には略奪し、開拓して作られたアメリカの脆さ見たような思いがする。あのリタイヤした人だけを集めたタウン構想にも、同じ思想が背景にうかがえる。若くて、パイタリティーがあって、パワフルで、病気をしないことだけが国を作り支えるわけではない。年を重ねた知恵と若い勇気が統合されてこそ文化は育つ。

日本でも老人に対する扱いが変わりはじめてきたが、これほどではない。日米の文化差について、タオイズムの影響などを例にあげて話すと、ボディールの右腕だというカレンは、タオイズムを知っているようで、それはなにと聞くボディールに説明していた。

地域に芽吹く小さな畑

午後は、一年半前から活動をはじめたという、障害がある子どもたちのためのガーデン、パウンドビューフームに行く。途中で、田舎町のファミリールレストランによって昼食。ビッグミシガンという名前のホットドックを注文。ボリュームはあるが、ソーセージは固くて大味だ。

「ほら、これつまんで」

ボディールが勧めてくれたのは、甘いサツマイモのフライドポテト。彼女はハンバーグにサツマイモのフライドポテトとジュース。

うーん、すべてオイリー、ソルティー、スイート。思わずカロリー点数が頭に浮かぶ。ボディールハグは、この高カロリーによって維持されているのかもしれないけど、膝が痛むという。ハグはすてきだけど、からだ

を大事にしてほしいな。ボディールは、存在が園芸療法のモデルなんだから。彼女の園芸療法は、活動とひとのかかわりを大切にしている。彼女の本質的なものだろうけど、理論とは別に作業療法の本質とおなじものがおおい。そのため、臨床家として相通じるところがある。

パウンドビューフームは、広々とした牧草地や農地のなかに作られた小さなガーデン。古い手押し車を利用した、とつてもすてきな案内板がでている。知的障害のある自分の息子が、大人になり、手助けする人がいなくても自分でなにかできることをと、ピバーが設立。無料で誰でも訪れることができる。規制のない自由さを守るため、公的な助成を受けず、ピバーが息子と寄付金を募りに出かけている。いろいろな野菜や草花が植えてあり、地域のボランティアが手伝ってくれているという。障害や年齢を超えてひとが集まり、緑と時間と作業を共有する気取らないガーデン。障害がある子どもたちにとっては自然のなかの学校、畑や野菜の色や形や数が先生。集まる人はみんな仲間。手作りの良さがいい。

ガーデンのまわりは、牧草地と道路の向こうはどこまで続いているのかと思うほどのコーン畑。トウモロコシ好きの僕も、一生かかっても食べきれないのではないだろうか、思わずポーっとする。小さなはじまったばかりのガーデンだが、椅子に座ってぼんやりしていると、すべての喧噪を忘れる。

夜のサラトガ

サラトガは競馬で有名。今はレースシーズンではないが、夜には若者がずいぶん集まってにぎやかだ。夕方、近くのスーパースタイルを探検に出かける。朝とナイトキャップ用に、フルーツや、バドを買って込む。フルーツや野菜類は、日本のように姿形の選別なし。すきな量だけ買えるようになってきているのがいい。どうして日本では、切

って食べれば同じなのに、キュウリの形や大きさをそろえるのだろうか。パックにするのだろうか。オーイェーは、これはウイスキーのつまみ、これは施設の子どもたちへのおみやげと、おもしろなものも手当たり次第かごのなかへ。きつと施設の子どもたちは、オーイェーが旅から帰ってくるのが、いつも楽しみだろう。今度はなにをもつて帰ったのだろうか。

添乗員役のユミコが、ボディールと仕事の話があるので、今日の夕食は自分たちでサバイバルなさいと言って出かけてしまった。一〇人あまりの日本人がぞろぞろ歩くのはあまりにもあまりなので、単になにが食べたいかという食欲からニグループ、中華料理組とその他組に分かれる。僕はダイエツトだと、その他組。

小さな町で、あつという間に一巡りしてしまう。これといって変わった料理もない。ぶらぶらしていると、どうも中華料理組が入っているらしいレストランがある。セツコサンが店の外からみて

「あの後頭部の具合はニューカントリーよ、ちょっとみてくる」
と確かめに店のなかに入っていく。強いぞセツコサン。

せつかくニグループに分かれたので、僕たちは別の店にと、隣のメキシカンに入る。食べるときは入り口がヒリヒリ、出るときは出口がヒリヒリ、というような大辛のタコス、ジャンバラヤやピザなどに、またもやヘルニアのペインキラーにとローカルビアを注文。食べ物はずべて辛いのがとりえて大味。ビールがうまい。

ナイトセミナー

夕食後、独り寝の寂しさもあり、バドをもつてツヨシとハカセの部屋を訪れる。研修初日であったが、午前中のレクチャーと午後の見学で得られたことをもとに、参考になるものと問題として検討しなければならぬ

ことなどについて、夜更けまで語る。

スタディツアーは夜の自由参加アフターセミナーがあつてこそ、その経験が深まる。語る人、眠る人、食べる人、聴きいる人。

名「ツクカレンの歓迎（九月一日、アンリミテッドガーデンの見学とレクチャー）」

朝、モーターのまわりを散歩すると、いろいろな植物に出会う。出かけた先では、地元の市場の探検と朝の散歩が楽しい。昼と朝の様子で、その町で暮らす人の生活やその町の住みやすきのレベルが見える。

朝食は、昨夕スーパーで買った桃とネクタリン、それにモーターのコーヒーとデニッシュ。何でも食べるが、朝から甘い菓子パンとソフトドリンクはやはりなじまない。

今日は一日、アンリミテッドガーデンで見学とレクチャーの予定。夜は、ボデイールの大きな右腕、元コックだったというカレンの自宅に招待されている。

スーパーだ、スーパーだ

八時五分モーターをバスで出発。一日トレーニングガーデンで研修なので、昼食はスーパーで買っていくことになる。大型スーパーに入ると、バスのなかでボーっと眠っていたみんなの目がキラキラ。勝手に自分が買いたいものを買いはじめ。これは大変、個人的なもの以外は一つのカートにまとめることになる。

昼食分はそろったが、みんなおもしろそうなものを見つけては、あれもこれもとおみやげに買い込んでいた。まだ先は長い。オールバニーデザイン、メイドインチャイナの小さな案山子が大人気。

はっと気がつけば、僕もワニとカエルの口が開くミトンのナベ掴みなどを、買ってしまっていた。スーパーは恐ろしい。僕たちの昼食用の買い物の量を見たバスドライバーが

「おお、へビーイーター」

と驚く。確かに。おいしそうなもの、珍しそうなもの、まるでピクニック気分で、みんながカゴに入れた結果だ。買い物時間三〇分と決めるがみんながそろったのは五〇分後だった。

朝からレクチャー

牧草地や馬の放牧地をいくつも越えて、アンリミテッドガーデンにつく。ああこれぞアメリカというくらい広々とした大地に、一〇〇人単位の研修が可能建物。アンリミテッドガーデンは、農家の子女に後を継ぐものとして、男の子には農業の仕方や動物の扱い方、女の子には料理や編み物などを指導するために生まれたという4Hクラブが基盤になっている。サラトガカウンティのコーネル大学農学部の一部門が主催し、地域社会からの寄付と軍からの助成金で運営。さまざまな年齢、異なる施設の障害者が利用できるようにしてあり、一週間の利用は延べ九〇人くらいだという。

最初はマスターガーデナー（園芸の知識と技術をもったボランティア）を育成すれば、ガーデンの運営ができると思っていたが、身体障害や知的障害がある人たちに対するサポートは、それだけではむずかしいことがわかり、元作業療法助手をしていて園芸療法の資格を取った人を入れ、やっと軌道に乗るようになったという。ボディールが専門家の育成の必要性を説く。

入りやすい入り口。安心と安全を守りながら外からも中からも視覚的に遮らない圧迫感を与えない垣。庭全体の目印となるランドマークの噴水を中心に、さまざまな高さで設置されたレイズドベッド。触覚、視覚、味覚、臭覚を刺激するさまざまな手触り、色、形、味や香りをもつ野菜や草花が植えられている。

僕は車椅子に座って、ガーデンの中をうろろろしてみた。動きやすい、直接草花にふれることができる。ただ、足下がすべてコンクリートでできており、その照り返しはきつい。援助してくれたコンクリート会社の寄付によるものでねとボディール。

朝からたっぷり2時間あまりのレクチャー。ガーデンの見学とヘビィーターピクニック風の昼食が終わると、またレクチャー。朝から晩まで見学とレクチャーのサンドイッチ。

カレンはコック

アルとボディールと研修生チエの三台の車に分乗して、カレンの家に向かう。僕が乗ったのは、二年前園芸療法の研修でアメリカにきて、昨年より作業療法士の資格を取るために学校に入学したというチエが運転するスズキのRV。彼女は、昨年走行中に鹿をはね、車が大破し、そのときから、怖くてスピードが出せなくなると安全運転。

アルとボディールの車は、あつという間にみえなくなり、時々家が点在するが、道だけが続く。日が暮れはじめ、対向車もなく、時折車のライトに動物の目が光る。どこまでも続く農地と林のなかを走ること一時間あまり。カレンの自宅についた頃にはすっかり日が沈んでいた。

薄紅の夕景色のなかに、家の明かりがみえたときには、正直ホッとした。広い敷地に泉があり、どこまでがカレンの家の敷地か、広々と続く芝生。古い姫リンゴの木が枝を広げ、さすがに園芸療法家らしく手入れされたガーデンに囲まれたすてきな家。

リタイヤした両親二人と暮らしているという家は、百数十年前の自宅をうまく残しながら、五年前に増築したという木造の二階建て。みんな目を丸くして、しばらく声が出ないまま、うっとりとした家を見せられてう。

園芸療法士カレンは元コック。さすが、だされるカレン手作りの料理は、どれも成田出発以来はじめておいしいと舌が喜んだ。父君が、遠来の客に喜ばれ、古い家具の由来なども話してくださる。古き良きアメリカの

匂いとその歴史が、一つ一つの家具に染みついているようだ。元の自宅は冬になると寒くて、今は暖かい時期だけ使用しているという。そういえば、増築部分はすべて二重ガラスの窓に、断熱材の入った厚い壁になっている。

ニューヨーク大学で生理学の教授だったという母君の著書を拝見するなど、すっかりくつろぎ、大きなクーラーボックスで冷やした数十本のビールもほとんど空いてしまった。誰かが

「アメリカの月もいっしょだね」という。家の灯火以外にはまったく人工の明かりのない風景のなかに、白く大きな月が昇っていた。

爆走ボデール

チエの車が先に出発するが、昨年の鹿事件以来安全運転という。五〇〜六〇マイル。老年暴走族ボデールは、そのチエの車さつさと抜き去る。悔しがるチエが

「ボデールはスピードだしすぎよ」

しばらく走ると、車の影もなかった真つ暗な道路の向こうに赤いランプが点滅。

「あ、こんなところにパトカーだ」「車止められているよ、ボデールだったりして、ハハハ」

と冗談を言いながら、少しスピードを落として横を抜ける。ちらっとみえたドライバーの姿。あれはまさしくボデールに違いない。

ウエイ・トウ・グロウには、僕たちが先についた。みんなで

「あれって、やっぱりボデールだったのかな」

といていると、しばらくしてボデールとアルの車が帰ってきた。

「ボデールはパトロールポリスの友達もいるのかい」

と聞くと、巨体をゆすって

「そうよ」

アルがそばで苦笑していた。

車に同乗していたキクチャンの報告によると、映画俳優みたいになかったこいおまわりさんに車を止められて、うとうととしていたみんなの目がパツチリ。

ユミコは人数オーバー違反が見つかったとはと、身を隠したまま。

どうもカッコイイおまわりさんは免許所の提示を求めているらしいが、見つからない。ボデールは

「日本から友人が来てね、パーティに行った帰りなの」

「ほら、これが主人の写真よ」

免許所が見つからないものだから、訳の分からない説明を始める。

そのうち、お巡りさんもあきらめたようで

「気をつけて」

と言い残して去っていった。

なんだか夢のようなひとときだった、とキクチャン談。

アメリカの精神保健

(九月二日、フォーウインズ精神障害者保健システムの見学、オールバーからフイラデルフィアへ)

ジュースとデニッシュの朝食も三日も続くと少し食傷気味。幼稚園のおやつのような気がする。朝、初めて、持参した生みそのみそ汁を作ってみる。日頃は自分でダシをとらないとみそ汁を飲んだ気がしない舌も、アメリカンフードのなかにあつては、日本のインスタント食品の味の細やかさがうれしい。今日は、アメリカの精神保健システムを見学してフイラデルフィアへ移動の予定。

おーマネー

広々とした敷地に、木々と芝生に囲まれ、平屋の大きな住宅のような棟が点在している。各棟には、年齢別、障害別に分かれて小グループで入院生活を送っている。ダイニングホールは別棟にあり、職員も入院患者もいっしょに利用している。

感情障害、分裂病、摂食障害、境界例、神経症といった通常の精神障害と、各種トラウマ、さまざまな精神的問題を抱えた子どもたちが対象。民間保険によるマネージドケア制度により、入院期間は七〜十五日。トラウマによる問題を抱えた子どもの入院期間は、大人より少し長いというが、それでも一カ月。

フォーウインズは、設備マンパワーともに充実した代表的な民間精神病院であるが、一日の入院費用は約一〇〇〇ドルとのこと。日本のダイケアにあたる、デイトリートメントも、利用期間は三〜六週間。入院、通院とも利用期間は費用の問題で決まるとのこと。もつと気軽に利用できる施設が必要だが、経費が問題で、民間では無理とスタッフがいう。

およそ一〇年前に導入されたマネージドケアは、カバー範囲が限られており、治療内容や回数は保険会社と病院の協議で決められ、病院が請求する治療費も全額は払われないという。すべてはマネーなのか。

一二回で終わるデイケア

日本のような過剰診療も問題であるが、いきすぎたマネージドケアも問題を抱えている。ベストな医療から適度な医療へという移行の過程に見られる費用対効果の影の部分であろう。慢性疾患や老人性の疾患など長期にわたるものは保険会社から治療費が支払われないため、国や州が支払うことになり、公的な施設に移る。その施設にもなかなか入ることがむつかしいという。

日本では、入院から地域ケアへという流れがあり、デイケアの利用者は何年も通っているが、ここでは三〜六週間。一日利用できるフルデイトリートメントは、通所期間の間に五〜一二回参加。半日利用するデイトリートメントは、計一八回が通常のコースになっている。

その入院、通所期間内に、サイコセラピーから生活指導、職業準備指導までおこなうとの説明であったが、内容は大半が教育的プログラムと情報の提供である。フォーカスは退院後どのような生活をするかということにあてられている。

分裂病圏の人はこの期間とプログラムにはついていくことがむつかしいため、多くは他の施設（州立の病院など）に移っていくしかないという。何とか適応できるのは感情障害、神経症の一部だろう。

レスキュードドック

この施設ではアニマルアシスティッドセラピーを導入しているといい、犬が連れてこられた。妙に顔が細くて、足の長い、おとなしいが動きや身体に表情の少ない犬だ。ひとのそばにいて、さわられても逃げはしない

が、今まで日本で出会ったセラピードックのような、人なつっこさや優しさはほとんど感じられない。

ひとを避けこころを閉ざした子どもたちや精神的に自閉した人たちも、動物にはこころを開き、さわったり散歩したりする。犬をつれて散歩していれば、犬を媒介にコミュニケーションが増えるという。どの国でも、動物と人間の関係は変わらない。

今日日本では、レスキュードックを、災害のない平時、アニマルセラピードックとして利用することが試みられている。彼らは、すこくひとに安心感を与え、常にひとのそばに寄り添ったり、遊ぼうとする。

そのことを犬の訓練士に話すと、この犬たちは、レーシング用に育てられているため、元来は攻撃的でひとにさわられるのを嫌う、ここにつれてこられたときには、ひとを寄せつけなかったという。再訓練は、いかにひとといっしょにすることができるようになるかだという。廃棄される運命の犬の再利用といった意味で少し誇らしげな説明であった。あの表情のなさ、距離感も、引退したレーシングドックを再訓練したものと同様で納得。

そうか、お前たちはレスキュードドックだったのだ。レスキューする犬ではなく、レスキューされた犬だったのか。人間が自分たちの楽しみだけのために、誰をも寄せつけず、ただ勝つために走り、勝てなくなると処分される運命にあった犬が、命を拾われてひとのこころをいやしている。

すばらしい環境のハードとソフトにふれ、やや複雑な気持ちで病院を後にする。

花開くフライドオニオン

昼食は、アメリカにきたら草履のように大きくて分厚いステーキが食べたいというセツコサンのセツなる願

い通り、ステーキハウスへ。

でてきたオニオンフライは、大きなタマネギに縦に切り込みを入れ、そのまま塩こしょうし小麦粉をつけて、丸ごと油で揚げたもの。まるでキャベツのような大きさのタマネギが、フライにされて、大輪の菊のように開いている。ただ圧巻、食べるしかない。

ツヨシ、ステーキの焼き加減に不満。確かに、レアはミディアム、ミディアムはウェルダンに近い焼き方。肉質の違があるからだろう。

これらも、すべてオイリー、ソルティー。それでも、みんなの食欲はとどまることなし、ダイエットダイエットと聞いていたケイコも、パクついている。

サバイバルアーティスト

午後訪れたのは、NPOのセルフヘルプ活動の拠点。一般就労がむつかしく、いく場所がない精神障害者に対し、一九九〇年から政府が助成金をだすようになって、はじまった活動。自分たちの作品を展示したり即売したりして、芸術活動を通して社会に参加できるようになったことを、当事者であるスタッフが誇らしげに語る。

スタッフの八〇パーセントは、何らかの精神的障害がある人たちで、多くは病気の治療をしながら大学にも通う道が開かれるようになり、すでにマスターやドクターの資格を取得したものもいるという。なかにはピアカウンセラーを雇う会社に雇用され、訓練を受けて、退院前の人の相談に乗ったり、裁判になった精神障害者の弁護を引き受けたりという仕事に就いている者もいるとのこと。

展示されている作品は、感情障害や神経症レベルの人のものがおおい。中心となっている人もうつ病だったという。分裂病圏の人たちはどのように過ごしているのだろうか。きっと表舞台にでるというより、こうした場によって生まれるささやかな空間のどこかで過ごしているのだろう。

こうした援助活動がはじまる前は、いい病院は紹介状がないと入れないし、補助がある公的な病院も、入院を希望しても二〜四カ月も待たされる状態。入院してもなにもすることがなく、ただ薬を飲んでたばこをすって日永過ごすだけ、落ちつけば退屈だけだったとピアスタッフの一人が語る。

今でも入院事情は変わらず、しかも

「本当に入院したくなれば、自分がクレイジーを演じ、クライシス状態になってみせるのさ」
とうそぶく口調は、先ほどの誇らしさとは違う。

そう、彼らはサバイバルアーティスト。

荷物はどこ？

町のサバイバルアーティストたちに別れを告げ、オールパニーの空港に向かう。

一五時四〇分には空港に着き、UAのカウンターに並ぶこと、数十分。前に進まない行列に少し不安がよぎる。

「本当にこれでいいの？」

という声に、ユミコが再確認に行く。おお、なんとカウンターの間違いに気がつき、並び直すと一七時。

チェックインが無事終わり、ここまで見送ってくれたアメリカの母ボディーと別れのハグ、ハグ。US-

一一九便は、定刻より少し遅れて出発。

一九時四〇分、約一時間遅れでフィラデルフィアに着く。さあ着いたと、到着出口に向かっている途中、後ろのほうでザワザワ。タカコとケイコが手荷物をもたずに飛行機を降りてきている。旅になれて気がゆるんだのか、疲れがでたのか、ユミコが二人をつれて飛行機に戻る間、一休み。

ドライバーはドラキュラの親戚

明日から二日間、本当はミニバスの予定だったのが、運転手が昨日までミニバスでハードな仕事が続いていたため、会社に大型でないと運転しないとって、彼のわがままでもってきたという大型バス。バスドライバー、君のおかげで、僕たちはまた大名旅行だ。

バスドライバーはやけに陽気、今にも歌い出しそうな気つぶのいい男。ドラキュラと同じ出身地の生まれで、自分もドラキュラの血筋を引いていると自慢そうにいう。こんな明るい吸血鬼は見たことがない。新種だろうか。

ホテル到着は夜遅く、ホテル周辺には店はないということ聞き、夕食材料をスーパーで買い込む。バスドライバー、現地案内人ともに道を間違えて、一度はホテルを通り越してしまう。

オーイーエー恋を語る

遅い夕食のために、レストランヒロボーが開店。さっそくの部屋のタンスの引き出しを引き抜いて裏返し、

テーブルが作られる。ルームサービスでビールを頼み、後はパーティー材料を並べてのバイキング。

いきさつは定かではないが、食後の団らんはオーイーエーの結婚に至る追求話になる。実家は福祉施設を営み、幼い頃から施設が遊び場だったオーイーエー。卒業後に家を継ぐ約束をし、東大の農学部に進み、約束通りその研修のため、千葉の研修センターを受験。一年遅れで入所したとき、受験会場で、ビビツときたのが、学習院大卒のお嬢様であった奥さん。そして、研修中毎日のように、一言のメッセージもつけずに、野の花をお嬢さんの部屋にそって入れておくというテクニク。みんな信じられないといった目で、自分たちがゴジラか海坊主といったオーイーエーの顔をのぞきこむ。

「いや、今はこんなだけどね、僕も昔はかわいかったのよ」

とはオーイーエー本人。

「女性は出過ぎちゃだめだが、待つだけでもだめ。いい男を捕まえるためには、餌をまかなければ」という。

その年季の入った恋の手ほぎきにケイコとタカコは、海坊主みたいといったことも忘れて、必死にすがりつくのであった。そうして、恋を求める乙女のフィラデルフィアの夜は、騒々しく更けていった。

アメリカの医療（九月一二日、午前プリンモアリハビリテーション病院、午後ロングウッドガーデン）

朝食付きということがフロントからレストランに連絡されていないため、個々にその場で注文し請求されるというトラブルが発生。ツヨシがレストランのマネージャーと交渉。結局六ドル以内までならなにを食べてもいいということになる。

オーダーして三〇分、待てどもこない。たかだか、サニーサイドの卵と野菜のバター炒めに、どうしてこんなに時間がかかるのだろう。ほかにオーダー中の客はいない。インド時間を思い出し、待つことにする。オーイーは隣のテーブルで、両手の人差し指と親指でめがねのように〇を作って目に当て、日本語で

「目玉焼き」

と注文して、伝わっている。

今日は、アメリカ園芸療法協会会長のカリンが勤務するプリンモアリハビリテーション病院を訪問し、午後ハカセが踊り狂うロングウッドガーデンに行く予定。

すばらしい環境

プリンモアリハビリテーション病院は、一四〇床。園芸療法施設は、大きな温室を中心に、周辺にセラピューティックガーデンが配置されている。色、香り、感触と植物のさまざまな特性を利用できるように、また身体機能にあわせたレイズドベッドや、ベンチ、歩行機能訓練用の階段などを、限られた空間のなかにうまく配置。ガーデンは病院の玄関の横にあり、来訪者も楽しむことができ、病棟からは直接訓練室や温室に来ることがができる。

園芸療法士の悩み

ここでは、脳腫瘍、頭部外傷、各種神経筋疾患などの身体障害者を主な対象とし、立位や坐位バランス、持久力、移動、利き手交換、認知訓練、感覚的な刺激による覚醒などを目的に園芸が利用されている。挿し木や、草花の植え替え、ドライフラワーを使った作品作りとさまざまな活動がおこなわれるように整備されているが、園芸療法だけでは、治療費が払われず、OT（作業療法士）など他のセラピストと連携してプログラムを提供。

園芸療法の利用は、患者の希望もしくはセラピストの薦めによるものであるが、利用の決定や評価、治療費の請求といったレセプト関係は、すべてOTやPT（理学療法士）がおこない、園芸療法士は患者のドキュメントがもてない、音楽療法やレクリエーション療法なども同じ事情という。

「今、アメリカでは、こうした治療の補助的なかかわりが経営上切り捨てられる傾向にあるのよ。保険で請求しても払われない場合もおおいしね」

環境や豊富なプログラムを提供することにより、ユーザーである患者に選ばれる病院としてアピールできるかどうかという営業用の道具として意味がなくなれば切り捨てられる、とカリンは苦しい胸の内を語る。

作業療法をする

OTが脊損の患者をつれてきて訓練をはじめ。車椅子に座って、鉢に花の植え替え作業。坐位バランスの訓練ということであったが、車椅子とテーブル、患者の位置関係が十分設定されていない。患者が自分で姿勢

を変えている。

しばらくいっしょに活動していると、本人の希望で分裂病の患者さんが参加しているのでかかわってほしいと頼まれる。十分なアイコンタクトはないが、少し化粧の厚い、つけまつげを大きくカールさせた老婦人が、ドライフラワーを使ってしおりを作りにかけていた。慢性のパラノイアの患者さんだろうか。

「僕はひろし、日本からきたんだ。座っていっしょにしてもいいかな」
自己紹介すると

「どうぞ。私はナンシーよ。今日はしおりを作るの。フィラデルフィアの町はもう見学したのと聞かれる。」

「オールバニーから来て、フィラデルフィアは着いたばかりなんだ」
まだ見学していないというと

「日本って東京からなの。フィラデルフィアはいい町よ」
と見学を勧められる。

いっしょに同じものを作ることにする。

「僕にも、教えてほしいんだけど、このしおりの台紙を一枚使ってもいいかい」

「だめよ。これは、今日私がする分よ。スタッフにいつてもらいなさい」

なるほど、それはそうだ。

彼女は、素材の配置、手順に彼女の決められたスタイルがあるようなので、それに従うことにする。スタッフに台紙をもらって、手順を教わりながらいっしょに作り、これでいいのか尋ねると、黙ったまま頷く。

ここでもマネージドケア

僕たちの見学の途中から、昨年日本に障害者といっしょにきた園芸療法士のウォーリーが、ワシントンから半日かけて車でやってきた。今日、明日と同行する予定。昼少し前、病院の経営管理に携わるレインプラウンさんから、最近の経営事情について話をいっしょにうかがう。

以前ペンシルベニアでは、運転免許を取得したときに五ドルの特別税を徴収し、それで重度障害に対する共済保険を維持していた。現在は制度もなくなった。その制度があった時代は、質の高いリハビリテーションを考えればよかったが、今はコストパフォーマンスが問われている。一対一の治療では効率が悪いので、園芸療法を使うことでグループセッションが可能になる、経営的にも助かっている、とカリンを見る。

経営者としての見方であると断りながら、園芸施設は維持経費がかかるが、患者の多くがうつ状態になり、PTやOTなどのリハビリテーション訓練がおこなえないことがあるが、そうした患者に対するうつ予防やQOLという点で園芸は有効、アメリカ人にとって昔から生活になじみのある活動だからだろうと説明される。園芸施設は、こうした施設があることの良さを理解してくださった地域の厚志家たちの寄付で作られたもので、寄付がなければ、病院独自でここまでの施設を持つのは難しかったという。こうした環境が地域と病院の架け橋的な役割を果たし、病院が利用されているという。

治療費支払いの決定権は保険会社であり、いかに明確な治療目標を立て、それが意味があるかを示さなければ保険会社が治療費を支払ってくれない、また治療期間が短く、退院後の生活を考えたリハビリテーションや援助のむずかしいという。ここでもマネージドケアか。

精神障害者の当事者活動への公的援助を例にあげ、精神障害者には地域で生活するための援助がシステムが試みられるようになったのに、身体障害者に対してはそうした援助がまだはじまっていない、アメリカの医療全体が医学モデル中心で動いてきたからだとのこと。

ピザパーティー

PT、OTの訓練室も見学。温水プールをはじめ、しっかりとした設備が整っている。設備とプログラムによると、基本的な機能回復訓練が中心で、訓練室の一角にあるADL訓練設備をのぞけば、PTもOTもあまり区別がつかない。二週間から一カ月という短期間で退院に結びつけるためには、どうしてもそうなるのだろうか。

立派な施設とコストパフォーマンスに追いつめられるリハビリテーション病院の実状に頭が重くなったところで、カリンによる、ピザパーティー。

大きなピザ、コーク、スプライト。

今研修している二名、すでに研修が終わった一名、二日前に着いたばかりというウォーリーさんが同行した一名の計四名の日本人研修生も加わる。研修中の一名は日本でPTをしていたが、海外での経験を経て思うところがあり、今園芸療法研修中という。いろいろ経験ができる若さがうらやましい。

「どうして、こんなに日本から園芸療法の研修にアメリカまで来るの？」
と、不思議そうにカリンがいう。

米国園芸療法研修終了認定書をいただく。

緑の殿堂 ロングウッドガーデン

ひろく広い。おおくくきくき。

タージマハル、ピラミッド、ロングウッドガーデン、そうした文化遺産は、常に権力と財力の差異のなかで生まれる。

大きな温室には、さまざまな熱帯植物や蘭の花が咲き乱れ、池には鬼バスの花が開き、見たこともないような色や形や大きさのカボチャが並ぶ。バナナがなってる、リンゴもかじっちゃえ。すごいなくと、みんなで呆気にとられる。

踊ってる。踊ってる。

その植物の種類豊富さ、敷地の広さ、大きさ、ハカセはすっかり植物酔いをしている。 僕の中から、鼻腔粘膜と口腔粘膜による植物とのコミュニケーションのために、勝手に動き出す。見るものさわるものすべて匂いをかいでは、あつちの木の実をかじり、こつちの花びらを舐め、ああ、五感がからだがフルフルとする。懐かしいアジアの植物の仲間、そして初めて出会う異国の植物たちよ。あるものはかぐわしく、華やかに、そしてあるものは妖しく、秘められた色香で誘惑する。

最初の広々とした空間に対して抱いた感動は、次第に疲労感へと変わっていった。なぜだろう、歩き疲れたからだろうか。豊かな植物の殿堂では、一方で、幹の径三〇〜四〇センチ、樹高一〇メートル以上はあるプラタナスを四角く刈り込んで並木道が造られている。本当にいいのかこんなことをしても。纏足の象を見せられたようなショックを受ける。

温室や幾何学的に作り上げた庭は確かに見所はある。しかし、なにか違う。僕は今も年老いた母が一人で住

む田舎の小さな家のまわりの小さな庭と菜園を思い出していた。特別な手を入れるわけではない、老いた母が一人、近所の知り合いと種や苗を分け合って、冬場をのぞけば年中四季折々にその自然にあわせて花が咲く。猫の額のような菜園では、ネギ、小松菜、なす、トマト、キュウリ、シソと、食事前に下駄履きで取りに行くことができる旬の野菜がとぎれることなくある。

広く緑一色に刈り込まれた芝に覆われた、ひとの生活の匂いがしない緑の殿堂。それは自然との共生というより、自然の力を利用しながらも、ひとがその強力な力で自然を支配して作り上げたガーデンだ。開放的な空間に感動しながらも、常に餌をやり、排泄物を掃除しなければならぬ大きな動物園を連想した。僕はいろいろな動物を視ることが出来る動物園も好きだが、里山歩きや川遊びなどで、鳥や虫や小さな動物たちに出会う方が好きだ。彼らも僕もいっしょに生きている。

特別チップさよならパーティー

夜はホテルのレストランで、甥の結婚式があり、明日一日で分かれ、一人帰国するオーイエーのさよならパーティー。僕たちはみんな、オーイエーのゴジラのような風貌と熟きった洋なしのような体型、内容はまじめなのだが、少し間の空いた一言に、心身ともにほぐされた。そのオーイエーと明日はお別れ。

パーティーは、特別チップを要求されるほど、明るく賑わしく騒々しいものだった。

ハンドベルの響き（九月二三日、午前知的障害者授産メルマーク、午後バークレイフレンズホーム、
フィラデルフィアからシカゴ経由トロントへ）

夜、雨が降り始めたらしい。明け方、また雨音が残っていた。ホテルのレストランで、オムレットとトースト、
コーヒーで朝食をすませ、八時出発。今日は、午前中知的障害者の授産的な機能をもった施設メルマークホー
ムを訪問。午後は、バークレイフレンズホームというナーシングホームに行く予定。

ハイバイバイバイ

お出迎へは、元気なバイバイバイ。左手指で指文字のようなジェスチャーをしながら
「バイバイバイ……」
と自己紹介し、僕たち一人ひとりに挨拶。

どこの国でも、どこの施設でも、ダウン症の人たちのこの明るさに助けられることがおおい。みんな思わず
引き込まれて、コミュニケーション。
ここでは、できるだけ自分たちの生活をということで、その能力に応じた活動が工夫されている。食事の準備
なども可能な限り自分たちでおこない、一部の利用者には工賃が支払われている。働いて、それが給料として
支払われることが楽しみで生きがいになっている者もおおいという。

利用者がみんなとてもゆつたりして、楽しそうに作業をし、生き生きとしているのが印象的だ。スタッフも
ごくふつうの服装で、穏やかな対応をしている。

建物入り口にあるフラワーショップの製品は、このガーデンで作られた草花を、みんなでドライフラワー
にして、それを作品にしたもの。素材から製品まで一貫してここで作っている。ポットはセラミック部門が担
当し、ポットをつるすマクラメの紐は手芸部門の作品。みんなの作品が集まって、一つの製品になるというの

がいい。

牧場もあり、馬やロバ、山羊、羊なども飼育され、動物とのふれあい、乗馬もできる。木工、織物、ステンシル、陶芸、ドライフラワーの作品と、知的障害の程度に応じて工程が工夫され、簡単な動作の繰り返しで作品ができるような工夫がなされている。デザインはスタッフが行っているという。

施設に対する公的な補助はなく、利用料と家族の寄付によって運営されている。施設の利用料に対して、多くのスタッフは詳しいことは知らないというが、だいたい一日七〇〇から八〇ドルくらいではないかとのこと。みなさん喜んで寄付してくださいますよとの説明に、日本で同じように施設を福祉法人として運営しているオーイーエーが、思わず

「喜んでだつてー」

とうらやましそうな声を上げる。ツアー中初めての間髪入れない反応だった。

有機の工夫は勇気がいる

ドライフラワーの素材になる草花のガーデンも利用者によって栽培されている。ガーデンは、雑草対策のために、木材チップや湿地帯に生えるイグサのような草、新聞などがマルチ材として利用されている。ふつうの雑草ではその種が混じっていたりして、それが発芽したり、雑草が腐敗してべとつくので、マルチ材としては適さないので、こうした工夫をしているという。

新聞マルチは有機農法として脚光を浴びているものことだが、新聞のインクの影響が気になる。インクの科学的影響について尋ねると、カラー印刷のインクは害があるので、カラーの新聞は使わないほうがいいと

いう説明。

納得しかけて、足元を見ると、カラー印刷で馬の写真までのっている派手なスポーツ新聞が、上にかぶせたイグサのような草の下からのぞいていた。気がついてみると、あちこちにカラー印刷のニューペーパーが敷き詰められている。

まあ、食べる野菜を作っているわけではないし、有機の工夫も勇気がいるんだな、と意地悪な感想。毎日続くレクチャーと見学、移動の繰り返しで、内容が豊富だけに疲れを意識していないが、少し旅の疲れがあるのだろうか。

アンコールハンドベル

みんなが、誇らしそうにベルを振る。

僕はまだなの、私の番はと、合図があるのが待ちきれないようにベルを振る。一〇数人がそれぞれ数個のベルを受け持って演奏する。聞いている僕の胸のなかでも、いっしょにベルが鳴る。思わずいっしょに手を振りそうになりながら、聞き入ってしまった。演奏が終わると、鳴りやまない拍手に、みんなが胸を張る。

誇らしそうに、恥ずかしそうに、みんなの顔にやったよという笑み。

楽器もすばらしいものだった。こんなにりっぱな、すてきな音色のハンドベルを見たのは初めてだった。海を越えてきた訪問者のために、アンコール曲が二曲。

日本からの訪問ということで、広報担当者が記念写真を撮りにくる。ついでにみなさんのカメラでも撮りましょうかという親切なことばに、カメラをもっているほとんど全員がさしだしたため、みんな一〇回あまりも

「はいチーズ」

質実敬虔なクエーカーのホーム

メルマークのスタッフが用意してくださった軽食を食べながら、バスは一路パークレイナーシングホームへ。パークレイフレンドのはじまりは、およそ六五年前。クエーカーのみなさんが仲間のためにつくったボーディングホーム。一九六〇年代後半に、いくつかのそうしたホームが集まって、法人組織を作り現在に至っているという。建物は、ひとが住むことを基本とし、クエーカーの人たちの生活様式にそってつくられている。管理より生活。それぞれの個室は、そのままその人の自宅を訪問するかのようで、施設を訪問したという感じがしない。

ここでもセラピードックが活躍している。この犬はきちんと訓練されているが、フォーウィンズの犬とは違い、少しやんちゃで人なつこい。性格の違う二匹が、訪れる人にさまざまな表情を見せる。かなり重度の痴呆の人も入所されているが、のんびりと椅子に座って風景を楽しんだり、昔の懐かしい映画を鑑賞したりと、その過ごし方は人それぞれである。

ベランダでは、気のあった仲間が外の庭を見ながら雑談をしたり、外気浴をしている。今年からメルマークに勤務していた園芸療法士が専従でかかわることになり、すでに新しいガーデンのデザインなども考えられており、今以上にみんなが自由に庭を散策しながら、植物ふれ、育てることを楽しめるようなガーデンにしたいと、夢が語られた。

この利用料は、月々二〇万円あまり、アメリカの他の施設の利用料に比べれば二分の一から三分の一であ

るが、クエーカーのみなさんでも、比較的裕福な人しか利用できないようである。施設はかなり質の高いもので、もうすこし平均的な生活の場に近づければ、もっと多くの人が利用できるのかもしれない。日本の老健施設もそうだ。生活といながら、まるでリゾートホテルや旅館のようなところが多い。

それにしても、病気があっても自分たちが歩んできた生活を失うことなく、療養と老後の生活をゆつたりと過ごすことができる環境と配慮。ここでは、エイジズムはまったく感じられない。今回のスタディツアーで見たなかでは、もっとも落ちつくものだった。

フィラデルフィアエアポートの難

パークレイフレンドを後にして約一時間。バスでフィラデルフィア空港へ。チェックカウンターの係員、僕たち一行一名のパスポートとチケットの予約券を何度も丁寧に照らし合わせて確認をはじめ。何度も確かめている。怪しがつているようではない。

座席の予約を済ませると、また一人ひとりのパスポートと照らし合わせる。同じことを繰り返す。なにか大きなミスをして、ボスから注意されたのだろうか。

荷物をあずけると、また荷物についているネームプレートとパスポートの名前と航空券と一名分ずつの確認をする。約三〇分、何度も繰り返し確認し、やっとその黒人の係官は安心したように、OKをだす。お疲れさま。

次に待っていたのは、金属探知器。成田以来、毎回にひっかかり、説明を繰り返してきたコルセット。ここでもピピッと反応し、身体検査。ズボンのベルトをゆるめ、シャツを開いてみせろという。人前だよ。

次に乗るときはパチンコの玉を一つ飲み込んでみようかと思うほど。

さあトロントへ

UA一八一七便は予定通り離陸。シカゴまでの約二時間の飛行中に軽食が出る。ハンバーガー、サラダ、チヨコ、コーヒー。シカゴで乗り継ぎ時間五〇分。初めて飲むローカルビアで一息つく。乗り継ぎ便UA一〇三四便、午後一時二〇分、一時間遅れでトロント着。迎えのバスがこない。現地の案内係がいらいらしている。空港の交通整理をしている警官を通してしかバスに連絡が取れないシステムになっている。警官はもう二度連絡したといい、少しは待てないのかと、怒っている。ほかにバスを待っているグループもないし、おかしいなというつつ待つ。

案内係が三度目に警官にバスを呼んでくれと頼んでやっと四〇分待たされてバスが来る。バスドライバーは、今初めて連絡を受けたという。警官にきちんと呼ぶように抗議しなさいと案内係にいわれユミコとバスドライバーが警官のところに行く。ユミコの話では、ドライバーと警官が顔を合わせて互いにニヤツとしたという。なにか変だな。

ホテルに着いたのは明けて一時前。ここではドアボーイが居て、みんなの荷物を運んでくれる。トロントの郊外にある大きなホテル、通常一泊二六九ドルあった。最初のシティモーターからだんだん宿泊施設のグレードがあがっている。

熱いコーヒーとインスタントみそ汁を作り、シャワーを浴びて寝る。

カナダの医療（九月一四日、ホームウッドヘルスケアセンター、午後セントジョセフ病院）

昨夜遅くついにたもかかわらず、今日は七時四五分に出発ということで、六時にはモーニングコールがある。みんなゆつくり寝る間もなく、それでも朝食は誰一人欠かさない。バイキング方式で、二〇〇人くらいが食事ができそうに広いレストラン。ウエイトレスもしっかりしていて、卵料理はコックがいて目の前でオーダーに応じて焼いてくれる。

今日は、午前中ホームウッドヘルスセンター（精神病院）、午後セントジョセフ病院（老人病院）を訪問する予定。

緑のなかの城

ホテルを出てハイウェイを走ること約一時間半。ホームウッドヘルスケアセンターに着く。四五エーカー（一八二、〇〇〇平方メートル、約五五、〇〇〇坪）という広い敷地に、中世の貴族の館のような迎賓館やいくつかの建物が点在する。林と起伏のある広い庭。共有施設のなかには、売店や図書室、レストランがあり、いわれなければ病院だとは気がつかない。一八八三年設立、当時は農地に囲まれた病院だったという。そうした立地条件もあるのか、今ではまるで緑のなかの城、設備の整った避暑地のホテルのようだ。

整った施設とプログラム

入院患者は、入院時一週間は外出できないが、それをすぎると、週末は夜一〇時までには帰ってくれば自由に出出できる。徘徊の激しい痴呆患者と、症状が激しく自殺企図のある患者用にそれぞれ一棟、鍵がかかっている。

る閉鎖病棟がある。

食事は、閉鎖病棟の患者、思い重度の身体障害がある患者、摂食障害で食事管理をしている患者以外は、全員食堂を利用。メニューは職員も患者も同じで、一つの食堂を簡単なついでで仕切り、職員用と患者用は壁の色（淡いブルーとピンク）で塗り分けられている。品数の多いサラダバーやバイキング形式の食事がうらやましい。

全施設禁煙で、たばこを吸う人のために建物の外に喫煙用の設備がある。大半の日本の精神病院が、病棟のなかはまるでたばこの煙でスモークルーム状態になっているのとはずいぶん違う。ヘビースモーカーは大変だろうけど。せめてたばこぐらい自由にといいのと、何でも自由ですから、喫煙はマナーを守ってというのと、あなたはどちらを選ぶだろう。

ビリヤードまであるフィットネス施設は、レクリエーションセラピストが担当し、余暇時間の利用指導をかねて午前中はプログラムに利用。午後は入院患者は誰でも自由に利用できる。宗教を問わないチャペルがあり、三人の牧師がいて、自由に話を聞いてもらえる。

これだけの設備をもつていても、マネージドケアで治療期間や内容が制限されるアメリカとは違って、一般入院は国の保険だけで可能。日本と同じである。セミプライベートやプライベートルームを利用する場合には、個人負担か保険でカバー。その特別室の利用料金は、一二五〜一五〇カナダドル。

アルコールや薬物、ギャンブルなどの依存症、摂食障害やさまざまなトラウマに対する治療、そしてコミュニケーションとの関係で分裂病や高齢者に対する治療プログラムをもっているという。三〇一床に対して、六〇〇人のスタッフと三〇〇人のボランティア。患者対スタッフ数だけでも日本のおよそ三〜四倍。

入院期間は、四週間程度から必要に応じ数カ月、病気や症状の程度によってきまるとのこと。公的な補助も

少しはあるが、民間経営を生かして自由な試みをしている。環境の不備な面として、一般病院の場合は各ベッドに電話が設置されているが、精神病院はまだ病棟に数台しかないという。日本では病棟に一台あるかどうか。環境が整備され、さまざまな施設やプログラムがあり、セキュリティやプライバシーの保護がしっかりしている。プライベートルームに芸能人や著名人の利用が多いというのもうなづける。

ボランティアが本当にしっかり機能していて、園芸療法の材料の準備や図書室の貸し出し管理、ギフトショップ、コーヒーショップと、至る所でボランティアが働いている。ショップの利益は、入院患者のレクリエーション費用に充てられている。

園芸療法セッション体験

ミッチェルは、カナダ園芸療法協会の創設メンバーで元会長。彼の本はユミコが訳して日本にも紹介されている。彼が、いつもおこなっているセッションの一つを紹介することで、僕たちに園芸療法体験のセッションをもってくれた。ドライフラワーや小さな小物、ポプリを利用した創作活動。こうした一回で作品が仕上がりに、自分でもって帰ることができるようなセッションの場合は、必要な材料を、一人分ずつセットしてある。その準備などをボランティアがしている。

園芸療法部門で、毎週延べ二〇〇名ぐらいの利用があり、三人のスタッフと四〇人のボランティアで運営。音楽による環境づくり、匂いや色による感覚刺激を大切にしているとミッチェル。

BGMの工夫、そして材料の豊富さなど、創作意欲を引き出す工夫はさすがであるが、ポプリの匂いなど人工の香りが強すぎる。文化の差なのかもしれないが、僕には日本の香道（香りをかぎ分け楽しむもので、茶道

や華道と同じくアートの域に達した道」とまではいかななくても、もう少し秘めやかな香りの方がいい。味も匂いも色もすべてが強すぎる。

セラピューティックガーデンの方では、一日、三セッションのプログラムがおこなわれている。一グループの人数は、一五〜二〇名。広々とした芝生に囲まれ、休憩用のすてきな四阿があるガーデン。

歓迎ランチ

ランチタイムは、VIPや特別のお客の時に使用するという迎賓館で、院長主催の歓迎ランチ。歴史と風格のある建築と調度品。おいしいワインに、ニューカントリーも思わずにつこり。みんなが持参したおみやげ、何が入っているか分からないまま小さな包みと、和紙に染めた日本の風土絵を、院長にプレゼント。和紙の染め絵はきれいなので額に入れて迎賓館に飾ることにしようといい、小さな包みを開け、漫画チックな白虎隊のイラストハンカチをみて

「これはわたしがもらって、これから患者さんに日本のおみやげだと自慢しましょう」
とにやり。

院長は一〇年あまり前、日本作業療法士協会の招待で日本を訪れ講演をされている。

ミッチェルのレクチャー

ミッチェルの園芸療法に関するレクチャーは、内容は特に新しいことではなく、基本的なものだった。この

施設には、OT、PT、PSW、宗教家、など多くの専門職がいて、それぞれの立場から同じ治療目的に向けて働きかけている。園芸療法では、園芸についてタスクアナリシス(内容からは工程分析のよう)をおこない、患者が作業しやすいように工夫していると説明。

カナダの他の施設ではOTがHTといっしょに園芸活動をおこなっているが、ここでは他の職種が、園芸療法の場合に来ていっしょにおこなうシステムとっていない。園芸療法単独でプログラムを実施し、アセスメントをおこない、園芸療法のアセスメントは他の部門に報告されているという。OTは六名いるが別部門でプログラムを運営し、主に認知機能や生活技能のアセスメントをおこなっているとのこと。分業システムのようであり、HTとしての自負がうかがえるが、いっしょにおこなうことにも利点がある。

ミッチェルの後に、依存症や摂食障害に対する園芸療法プログラムのレクチャーをジュリーから受ける。摂食障害に対するプログラムで留意する事とはという質問に、食欲を刺激するものは使わないようにしているとジュリー。ミッチェルも頷いている。それは少し短絡的すぎると思うが、彼女には言えなかった。

アメリカでもそうだったが、園芸療法関係の人たちは農林、植物関係の出身の人が多く、植物の特性、環境の設定、それらの利用という点では大変すぐれている。その点は学ぶものがたくさんある。

しかし、医療面に関する知識や技術、特に心身の機能や病理特性を考慮したかわりという点、ひとと作業の関係やひとが園芸をするという行為や動作などの分析という点が弱い。そのため、治療仮説とそれに基づいた関わり、効果と治療要素の因果関係の説明がほとんどなく、不十分である。

作業療法も同じ課題を常にもっているが、経験的な情緒的理解を求めるだけでは、マネージドケアのような流れにであうと、せつかくの豊富な機能が評価されないだろう。

これだけ植物の特性が使える人たちを、他の職種特にOTがうまく生かされていないのももったいない。

日本でも同じ問題がある。お互いの得意な部分を生かしあう工夫を考えていかなければと、チームアプローチの基本を再認識した。

セントジョセフ

ミッチェルが指導しているというセントジョセフは、老人ホームと老人病院。レクリエーション療法の一環として園芸療法が利用されている。そのため、レクリエーションセラピストが予算管理をしているので、不由を感じたことはないが、自分たちで自由に計画ができないとは担当者のワンダ。

ここでも、ボランテニアが環境整備などにたくさん参加。新病棟の建設が予定されていて、新しい建物では、温室なども整備される予定。いずれも、こうした活動が医療や療養プログラムに取り入れられるようになるまでには、先駆者たちのさまざまな努力がある。日本では、これからそうした努力をしなければならない。

カナダの和食を試そう

六時半、ラッシュを乗りこえホテルに到着。トロントの町に出るにはこのラッシュを考えると大変なので、ホテルで夕食をとることになる。日本を出て一週間、一度話の種に和食を試してみようと、ホテルの最上階に位置する日本食レストラン「SAGANO」に行く。そうかな、でももしかしたら、かなりいいホテルの最上階にあり本格的日本食をうりにしたレストランだからと、相反する気持ちを抱きながら入る。

ああ、やはりそうだった。

バスのすぐ下で着物をつり上げるように閉めた帯、なんだか変な半被と鉢巻。あの007の映画に出てきた日本がそうだったように。富士山、障子、着物、畳、竹のイメージ。

カナダでは、カリフォルニア米が作られ、日本酒や豆腐まで作られているというのに。日本も、韓国も、中国も、ときにはフィリピンのあたりまで含めて、その違いは不確かなのだろう。どんな和食が出てくるのか、みんなわくわく。

酔の物八〇〇円、ぶつ切りのキュウリに、まだ十分戻っていない干しわかめ、噛み切れないほどしっかりゆでたタコがやけに甘酸っぱい酢に浮かんでいる。野菜炒めセット一四〇〇円、もやしと一口では食べにくい大きさのニンジン、ピーマンをこしようとしようゆ味で炒めたものがたっぷり二〜三人分はある大盛り、そして茶碗に盛られた長粒米のご飯。

寿司は日本の一般的な回転寿司よりはいい。うどんはうどんそのものとダシだけは日本製らしく食べられるが、天ぷらうどんの天ぷらにはピーマンやアスパラまで入っていた。あとは、素材も料理法も中華風アジアン。

ホテルグッツの新利用法

「SAGANO」ですっかりカナダ風和食を堪能して、レストランヒロポー、カナダ支店で二次会。

「このホテルはこれまでと違って高級だから、ボディー用のスポンジまであるけど、少し小さいね」

とキクチャン。みんな、そんなもの部屋にはついていなかったと怪訝な顔。ほらこれよとバスルームからもつてきて

「最初はね、少し泡立ちが悪いなと思って、石鹸をつけてこすっている内に泡だって、でも小さいから背中を

洗うのには不便だなんて思ったの」

それは、靴磨き用のスポンジ。なめして加工した皮を磨くもので、人間の生きた皮を磨くものじゃないよと、大笑い。

「アツハ、アーツハハハツアーツハハ」

セツコサンの大笑いが止まらなくなる。みんなの腸もよじれる。スポンジは確かにサニタリーグッズと一緒に置いてあり、ふたには小さく shoe sponge と書いてあった。

ほかにも同じデザインで同じ大きさの、片側に英語、反対にフランス語で説明のある小瓶が四本ある。ユミコは、その内のリンスと書いてあるのをシャンプー後に使って悲鳴をあげたとキクチャン。きつと頭皮にしてみたのだろう。実は僕も同じことをしかけて、手のひらに少しうつしたときに変だなと気がつき、小さな説明書きを読んだのだった。確かにリンスと書いてあるが、説明の部分にはマウスリンスとある。

タカコは、コンデイションナーと書いてあるのをヘアコンデイションナーと思いこんで使ったという。それはどうもお肌のコンデイションナーらしい。

少し立派なホテルには、いろいろなホテルグッズが置いてある。

ナイアガラ（九月一五日、ナイアガラ、カナダの園芸療法学校）

夜遅く到着し、朝早くから午前、午後とレクチャーに見学が続き、今日は最初で最後のフリータイム。みんなナイアガラだ。今日は今回のツアーで初めてガイドがつき、年間日本人だけで五〇万人訪れるというナイアガラで、みんなお登りさんを楽しむ日。

とはいえガイド任せにすると、きっと日本人観光客用のおみやげ屋に連れて行かれたりするので、自分たちでコースを決めようと、昨夜の内に作戦会議が開かれた。名づけてガイドほめ殺しお願い作戦。

まず、朝早くからの労をねぎらい、ガイドさんって大変な仕事ですね。そして僕たちは、わがままツアー、ふつうのおみやげ屋より、カナダの人たちの生活が知りたい。ここに住んでいる人たちは、どんな場所で購入したり食事したりしているの。おいしくて安い店は。トロントに詳しいガイドさん、そんな場所を教えてください。バスはホテルまで送られなくていい。ナイアガラの後はまっすぐトロントまで帰り、そんな場所をみんなをおろして。帰りは地下鉄やバスやタクシーに乗ってみたいから。こんなわがままは町に詳しいガイドさんしか頼めないと、みんなで口々にお願ひして、チップ先渡し。

大成功。その日に組まれていただろう予定は、僕たちの希望通りに変更され、ガイドはバスドライバーに新しいコースを告げている。

花時計

ゆつたりとした敷地に並ぶ、別荘地を眺めながら、ナイアガラへとバスが走る。途中で大きな園芸店を見つけると、あそこに入りたいたいからトイレ休憩しよう、バスを止めてもらう。お店が並んでいる場所で、バスを止めて買い物でもというガイドさんに、バスのなかからゆつくり見るだけでいいと、徐行で通り過ぎる。わが

ままツアー。

直径一二メートルあまりという花時計は二万株以上の花が毎年デザインを変えて植えられる。手入れの行き届いた沿道は、きれいにしている人に対しては、税金の免除があり、沿道沿いに住宅や別荘を持つているひとが手入れを怠らないからだと言明。公園は園芸学校の生徒が実習をかねてメンテナンスをしている。

カナダ式民宿

ナイアガラ周辺には、いろいろな旅が楽しめる宿泊施設がある。一九世紀の古き良き時代の香りを残す小さな町、ナイアガラ・オン・ザ・レイクを抜けると、子どもが巣立つて部屋が空いたお宅が、自宅を民宿にして、ベッド&ブレックファースト。途中、今後のスタディツアーのためにと、その内の一軒を見学。

すてきな部屋に、小さなプール、気さくでおしゃべりなおばあさん。気取りのない、シンブルな作りがいい。あの豪華ホテルで、ドアボーイに荷物を運んでもらって緊張するより、こんなところが落ちついていいな。こうして、部屋を貸し、少し稼いだお金で、寒い冬は、今度は自分たちは南の暖かいフロリダのほうに避寒。老後を楽しむカナダの人たちの知恵。

あこがれのナイアガラ

四〇年あまり前に発電所ができて水量が減ったというが、数百メートルにわたって、五〇メートル以上の落差で流れ落ちる水。水煙が渦を巻いてわき上がり、上空で雲のように渦巻く。その、音、瀑布、水煙、圧倒的

な自然を前にするとことばがなくなる。初めてこの滝を見たフランス人宣教師ルイ・ヘネピンは、なにを感じたのだろう。

岸壁を離れた遊覧船が、旋回する。大きな岩を飲み込んで渦巻く、巨大な激流のようなアメリカ滝。そのアメリカ滝とカナダ滝を二分するゴート島では、滝を下から見ようと黄色い雨ガッパを着た人の群が、アリの行列のように、しぶきのなかで岩に張りついて歩いている。

大自然の前の人は、なんと小さくおしい生き物なのだろう。貴賤高下の隔てなく、貧富ともにのがれなし。一遍上人の語録が浮かぶ。

船はゴート島を左に見て、アメリカ滝に向かう。薄いブルーのビニールに包まれた人々。エンジンがうるし声をあげる。ゴンゴンとスクリュウが回るが、滝壺の水流と渦に舵もスクリュウも効かなくなる。船は、ローリングとピッチングを繰り返しながら、木の葉のように揺れる。

足を踏ん張り、手すりに掴まる。流れ落ちる水があたりの空気を巻き込んで、滝壺のなかは嵐のように、水しぶきと風が渦巻く。

「あーっ」

と声を上げ、両手をいっぱい広げ、ユミコが水しぶきと渦巻く風に身を投げ出している。

呆然と立ちつくすハカセ。至福の表情のニューカントリー。小柄な身体を生かして、いつの間にか人波をかき分け、デッキの最前列で手すりにしがみついているセッコサン。水浴びをした狸のようなヒロポー。

これがナイアガラだ。これがナイアガラか。滝壺から離れゴーゴーという水音が遠のくと、ため息のような人の声と、風にはためく薄いビニールの雨ガッパのシャワシャワという音が聞こえるはじめる。

カナダ園芸学校

トロントまでの帰路、またまたわがままツアーのお願いコース。カナダ園芸学校と、彼らがメンテナンスしている公園による。

一クラス一五名、二年間、休みなし、授業料無料。カナダ園芸学校は、公園の一角にある。一流の園芸士や造園技師による指導が、公園のメンテナンスという実践を通してなされる。授業料無料の代わりに、技術を学ぶ実践として学生が公園をメンテナンスする。一石二鳥だ。沿道沿いの庭の手入れに対する税金の免除といい、園芸学校のシステムといい、どこかの国の政治家も見習ってほしいね。

この公園は、植物の色の組み合わせに感動。ロングウッド・ガーデンの力でねじ伏せたような圧倒感とは違う、なにか安心感を覚える。すすすくとのびた並木。あちこちで園芸学校の学生が手入れをしている。カナダ以外の国の人にも同じ条件で入学が許されているという。

公園に堪能した後は、さあ、カナダ最大の年といわれるトロントの町へ。バスのなかで、トロントの町の探検について、ガイドから情報を仕入れる。

チャイナタウン

トロントの名だたる建物は、バスでドライブしながら見学。バスを降りてからは、パンクの若者であふれる町並みをウインドーショッピング。おとんぼのミホは、おもしろそうな店を見つけると、すぐに入っていく。つられてみんなも。

中国やインドの人たちはいろいろな国に自分たちの文化を持ち込んで、そこでたたかに生活する。トロントのチャイナタウンもそうした町で、まるで香港の一角が少し広いとおりに引越してきたように、そこだけチャイナになっていた。入ったレストランも、下町の本格中華。

老酒も以外にいいものが置いてあったが、盃だけはいただけなかった。三流温泉街の場末の飲み屋ですでてるような、酒をつぐと盃の底に芸者やヌード写真が浮かび上がるしるもの。

使い古された少し小汚い盃の、老酒のに浮かび上がる絵は、不鮮明でまるで判じ絵金髪のヌードらしきものがみえる。研究熱心なハカセは、目をまん丸くして、新種の植物を発見した少年のように老酒のなかの判じ絵に魅入っていた。

フルーツが信じられないほど安い。手頃な大きさの熟したドリアンが八ドル。思わずドアボーイがいるようなホテルに泊まっていることも忘れ、バンコックの水上市場で食べた味を思い出し買ってしまおう。

トロントの地下鉄

地下鉄とバスに乗って帰ってみようということになる。地下ホームに降りると電車が入ってくる。乗り込んでホームに目をやると、みんなは乗り込まずに降りてこいといったふうにあわてて手招きしている。しまりかけたドアに身体をはさませ、無理矢理こじ開けて飛び降りる。

どうしたのだろう。ケイコが反対行きの電車だという。そんなことはない、確かめてのつたのだから。わいわいがやがやいいながら、路線図を確認。さっきの電車ではなかったのだ。ああ、みんな疲れている。

次に入ってきた電車に乗る、ニューヨークのゴミ箱のような地下鉄とはまるで違い、きれいで、しゃれてい

る。バスの乗り換えと教えてもらった駅で降りるが、バス乗り場がはっきりしない。みんなの注意力も少し怪しくなってきた。強行軍の旅の疲れがでてきたのだ。タクシーに分乗してホテルに帰る。

ホテルでドリアン

ホテルについてドリアン試食。品種改良されたのだろうか、昔のように匂いはきつくない。これほど、匂いと食べからの差の大きい果物も珍しい。ニューカントリーはその食感と味の微妙さに頷いている。女性群は、ぬか漬けの匂いがするだとか、いろいろいって珍しいものの試食に終わる。

ドリアン試食も終わり、明日は六時出発だ。

トロント発シカゴ・成田(九月二六日、一七日、トロント発シカゴ経由で成田へ)

まだ明けやらぬ五時にモーニングコールがある。今日は、シカゴ経由で、日付変更線を越え、時差一二時間、日付からすれば半日未来にある日本を目指す。

おにぎりをもって空港へ

朝早くて、ホテルのレストランで朝食がとれないため、代わりにと弁当が用意されていた。おにぎり三個とお茶。寿司米用の特別なカリフォルニア米だという。タイ米などとは違うが少し面長なもちり感の少ない米。チャーハンなどにはむくだろう。

今回のツアーのなかで、唯一日本のご飯に近い感じの米にであう。眠い目をこすりながら、おにぎりをほおばる。

三度目のシカゴ

UA一六七七便はシカゴの九時過ぎに到着。三度目のシカゴ空港。乗り継ぎまでに三時間弱。みんな最後のおみやげを買いに、これまで通過するだけだったシカゴ空港を散策。

おとんぼミホはもうすでにどこへやら。ツヨシはいつものマイウェイ。ユミコは少し気が抜けたのか一休み。ハカセとニューカントリーもそれぞれに行動。

パラレルな集まりであったグループが、個々の目的のために、成熟と退行を繰り返しながら、凝集し統合してきた。そして今、そのグループにおける共有体験を通して得られたものを、それぞれ個人の体験として身の

内で確認する作業が始まっているように見える。

成田へ

UA八八一便は、ほぼ予定時刻にシカゴ空港を飛び立つ。うとうとしかけては、目が覚め、目が覚めると機内食が来る。最初は、牛肉の照り焼き、ごはん、オリエンタルチキンロール、そば、フルーツ、コーヒー。半ばで、ミニカップうどんとチーズ、クラッカー、干しぶどうにブルーベリー。到着前に、ハムとモンテレージャックチーズのフォカチアパン。帰路もおよそ一二時間、フォアグラの生活をしながら成田へ。

眼下に千葉の海岸らしきものが見えてきた。日付変更線を超えて往復するスタディツアーは、日常の現実を超えるミニタイムトラベルだった。帰路の一二時間は、その現実で有永非日常的なミニタイムトラベルのようなグループ体験から、現実に戻る儀式にあたるのではなからうか。シカゴと成田はそれぞれにタイムトンネルの出入り口。

旅の終わり

九月一七日一四時四五分、成田到着。一〇日間で、すっかり疑似ファミリー化したグループが、それぞれの現実へと向かう。わずか一〇日間の旅、それは広いアメリカやカナダの一断面ではあるが、さまざまな凝縮された現実であった。

これまで、文字や映像を通して部分的に知っていた人や自然や制度の一部を、自分の五感を通してふれることで、僕は自分や自分が住んでいる自然と社会を再確認した。インドを含むアジア周辺の生活を見直した。それは、それぞれの風土と文化、ひとと他の命との共生のありようの再確認であった。

そして、日常の生活の中であっている人たちとの非日常的時空間の共有、初めて会う人たちとのコミュニケーションション、それらが、新たな出会いと発見を生み、自分を取りもどすきっかけとなる。遊びをせんとや生まれけむ。

この体験を風化させないために、そして、追憶の加工がなされないうちに、スタディ・ツアーのレポート番外編として、この旅日誌を残す。

ツアーメンバーの感想

人は旅に出て、自分を取りもどす。さまざまな出会い、とまどい、冒険を通して、新たな発見や自己の確認をおこなう。園芸療法スタディツアー番外編旅日誌最後の章は、参加者の一人ひとりが語る、旅の体験。

同じ場と時間を共有しても、ひとはそれぞれの感性とフィルターを通して、感覚し、知覚し、認知する。アメリカ、カナダ、園芸療法、そして自分の日常を構成していたものとはちがう人や文化と、それぞれのようない出会いをしたのだろう。

私の癒し（新国正明：ニューカントリー）

無謀といえば、無謀この上もないツアー参加ではないのか。成田空港特別室での初顔合わせ。参加者名簿を何度見ても、勤務先欄真つ白なのは私ひとり。何か入れておけばよかつたかなと一瞬考える。年齢も一番上の子、約一名は私に近い男性がおられるようだ。

今ここにいたっては、心境はまな板の鯉、初心者に徹して、勉強させていたどころ。何とかなるだろう、いい人達のようにだし（失礼）と開き直りの心境であった。教員生活三八竿、教壇に立ち、教育行政に携わり、二〇〇〇年三月定年退職した私に、初めの教え子たちは、一泊の退職祝いの会を盛大に開いてくれた。駆けつけてくれた教え子たちは、五〇歳になった今の自分たち姿を見て欲しいとの思いもあるだろう。面影の残る一人ひとりに精一杯の言葉をかけようと努める。実社会に出て、順調にいつている者だけではないだろう。むしろ参加できない教え子の中に苦しんでいる者もいるだろうことを思い胸が痛む。教え子たちは「先生、これからどうするの？毎日どうしてるの？」と問いかける。それぞれの成長過程の中で、心の癒しを求めている子ども

たちに何かできることはないだろうか、今一番「園芸療法」に関心があるとはいえ、模索中の私にとって、まだ明確な回答は出てこず。広角の視野で見、聞き、話し、考えようとしている今。私の答えは「自遊人してまず、自遊っていいもんだね。」と答えている。

今の社会に目をやる時、物が豊になり、一見暮らしが快適になっていくように見えても最近の日本の多くの少年事件を聞くにつけ、子どもたちがどう生きていたらよいかわからない時代が来ているといつては、言い過ぎになるであろうか。

「便利さ、物の豊かさ、快適さ……。それがどうして悪いの？と若者にいわれる。そしてそこに係わっている大人たちは、言葉で反論できても、本当に行動で説得できているだろうか。本当に大切なものが何なのかかわらない子どもたちがいて、本当に大切なものが見えない子どもたちがいる。この子どもたちにも「園芸療法」がかか係わりうる場面があるのではないだろうか。しかし、今の私にはその道筋はわからない。

この三月まず、岩手県の東和町に吉田みな子さんの園芸療法を拝見させてもらい、代表澤田みどり先生の園芸療法研修会一年間のスターコースに入れてもらい、園芸療法の勉強がスタートしたばかり。

今回のく自然と癒しく園芸療法視察研修は、現在行われているアメリカ・カナダの一部にせよ実際をこの目で見るのができたことは、これから学んでゆく時の比較する一つの基準としての意義は大きいと感じる。

アメリカ園芸療法協会認定高等園芸療法士のボディール・ロ・アナヤ先生の間味あふれる対応、そしてバイタリティー。年齢ではない。対象者を目の前にする時、アセスメントは一瞬の間に行われ、計画がアクティヴに湧き、実行に移される。しかもそれは、患者に喜びをもって受け入れられ、変化をもたらす。園芸療法士の偉大なる母。

種々の施設で実施されている園芸療法はとても興味深いものであり、障害がある人々にどのように係わって

いるのか参考になることは多かった。精神障害者、知的障害者、知的障害児、高齢者それぞれの施設そしてリハビリテーション病院、老人保険施設と私にとつてはじめてのことばかりで、新鮮な気持ちで見せていただいた。

アメリカの医療システムの中で、作業療法、理学療法が保険対象の点数に数えられるが保険会社の査定で、患者のそれこそ心、気持ちに係わる音楽、レク、園芸療法等が切り捨てられてしまうという実態は厳しいと素人なりに思われた。

シカゴから成田への一二時間の機内も今回の視察研修の最後の一コマと思えるビデオ上映があった。題名は「28Days」―薬物依存症患者の施設でのある女性患者を主人公にした映画である。その中の一コマに入院患者を集めて施設のカウンセラーの講話があり、退院間近の男性患者が質問する。「女性との接触は、いつからしてもいいでしょうか？」カウンセラーは「一年目まず花を育てなさい。旨くできたら二年目動物を飼いなさい。それも旨くいったら、大文夫です。」というのです。まずスタートが植物と係わること、それができるところが大前提。この映画は人間、社会での植物の働き、その大きさを示すものだったと思えるほどでした。女性とのうんぬんは別にして、植物を介する園芸療法、人間の生きる力を自然の力がまさしく引き出していることを示していると感じた。

充実した気持ちで、無事一〇日間が過ぎたこと、細部にわたってご配慮いただいた山根先生、菅先生両先生にそして個性豊かな参加者の皆さんに心から感謝いたします。

今後ともこれを機会にご指導をいただきたいと思っております。その時はどうぞよろしくお願いいたします。ありがとうございました。

「マイナーな園芸療法」

恥を忍んで白状するが、この研修に参加する以前、私は作業療法士の存在すら知らなかった。医療システムの中で、作業療法士の役割が確立されていることも知らなかった。作業療法の効果が行動分析の手法で評価できることや、そのための研究が行われていることも知らなかった。当然のことながら園芸療法も、その効果を客観的に評価される必要があるのだということも夢想だにできなかった。だから、最大の収穫は、「アメリカ・カナダの医療現場にまで出かけて行って、そこでツアーメンバーの方々から作業療法に関する話を拝聴できたこと」かもしれない。

研修に行く前は、園芸療法の先進地域とされるアメリカ・カナダの園芸療法の運用システムや、園芸療法に特有なガーデンングのノウハウを学びたいと思っていた。帰国したらそれがすぐに役立つのではないかという安易な期待もあった。北米には何か「洗練された園芸療法」というものが確立されていて、それが急速に社会に受け入れられつつあると勝手に空想していた。その思いこみがいかに根拠の無いものであるか、それがわかったことも今回の収穫といえる。アメリカでは、園芸療法を行っても保険会社から医療保険が下りないという。これでは園芸療法が広く医療として普及することは難しいだろう（もつとも音楽療法やアニマルセラピーの置かれている状況も、園芸療法とそれほど違いはないらしい）。

それならば、医療保険をあてにしないでいい、経済的に恵まれた一部の人々だけが園芸療法を享受できるだろうか？ おそらくそれは正しいのだろう。保険会社や医療機関は、園芸療法が療法の中核を担うとは考えていないようである。園芸療法とは、園芸技術としては新味のない園芸テクニクや陳腐なハーブ利用の寄せ集め

である。また、個々の園芸療法士の思い入れが強すぎるが故に、園芸療法は普遍性を獲得できていないようにも思われる。少なくとも園芸療法は完成からはほど遠く、発展途上の段階にあるようだった。

「わかりにくい園芸療法」

園芸療法は明快であるようにできてその実、非常にわかりにくいものだと思う。研修期間を通じてそのとまどいは消えることはなかった。私は医療の専門家ではないので、療法としての園芸療法の効果を議論する能力はない。しかし園芸療法について捉えどころがないと感じるのは、そうした専門的知識の欠如ばかりではない。まず適用範囲が広すぎて、手法に共通点を見出すのがむづかしい。それから用語上の問題であるが、「園芸療法」は結構乱暴な造語だと思う。研修中、随所で見られた趣味性（金持ちへのアピール）や緑の効用に対する過剰な礼賛も、療法としての園芸を不透明にしていると思う。「癒し」を園芸に求めるのは、勝手な思い入れに過ぎないと思う。園芸は「癒し」ではなく「肥やし」である。これが真実である。「園芸」「緑」というイメージが、勝手にふくらみ一人歩きしてしまっているのではないか。本来治療とは関係のない園芸が、どうして治療に応用できるのか？ 果たして園芸療法のめざすものが、通俗的な意味での園芸で適切に表現できているのだろうか？ 研修先でも納得できる説明はなかったように思う。

作業療法を現代の新薬に例えるならば、園芸療法は漢方薬のようなものかもしれない。それは中世の錬金術、不思議なアマルガムのように、複雑な要素が混然一体となって存在している。だからなかなかその本質が見えない。園芸療法は不思議な万能薬のようなもので、成分分析や作用メカニズムの解析は行われていないけれどもどんな症状にも効くというものだから、手当たり次第に処方されているかのようだ。そういう意味では園芸療法は未だ民間療法の域にあるのかもしれない。園芸療法士は現代の魔女ということになるか？（そういえ

ば昔先生は魔女みたいだなあ。今度、鍋とほうきをプレゼントしようかしらん。あつ、でも野宿だけはしないで下さいね）「要は効けばいいじゃないか」という声もあるが、果たしてどれほどの効果があるのか？適用範囲は？投薬治療だったらそんな乱暴なことは絶対しないだろう。

「園芸療法と漢方薬」

園芸および園芸療法は漢方薬によく似ている。つまるところどちらも多要素系なのだ。そして多要素系であるが故の魅力があるはずなのだ。各要素をバラバラにしてみると個々はそれほど有効ではなくても、全体では複数の要素が相乗的に効果を発揮するとともに複数の効果を発揮することで、高い効果を上げるといったことが起こりうるのである。こうしたものの見方は、山根先生との議論で啓発されたものである。うーん。あのこときのお話を録音しておけば良かった。もっとレポートが楽に書けたかもしれないのに。

ではこの多要素系（園芸）は、療法として有効な要素から成り立っているであろうか？有害な要素はないのであろうか？相乗的な機能は見出されるのだろうか？こうした問題は専門家にお任せするとして、ここでは園芸が治療に有効であるならば、それはなぜかということ別の側面から考えてみたい。治療は身体的・精神的機能の回復・発達を目的とするものだと思うが、さらに一歩進んで「身体的・精神的機能を回復・発達させるためには、ヒトという種において際だっている能力を総合して発揮させることが有効である」と考えてみる。そうすると、農耕や園芸が大きな意味を持つてくるように思われるのだ。

人類は、五〇〇万年にわたる歴史のほとんどを、集団生活を営み二足歩行をする視覚ハンターとして過ごしてきたと言われている。そして現生のホモ・サピエンスは、言語を操り、精巧な道具を生み出し、動物や植物に関する多くの知識を持った類を見ない恐るべきハンターであった。しかし農耕が発明されたのは人類史の中

ではごく最近のことである。

農耕は最終氷期末期に発明されたと考えられている。それは、氷河期末期の気候大変動の中で生み出されたらしい。気候変動で危機に瀕した人類が、それまでの狩猟・採集時代に培った能力を総動員することで農耕を発明したのだと考えられている。農耕と狩猟とは対照的なものではなく、農耕は狩猟の子供なのだ。それは一見、親とは似ても似つかぬ姿をしているけれども。農耕は狩猟・採集文化の集大成であるとともに、環境改変という全く新しい世界を拓いたという意味で計り知れない意味を持っている。五〇〇万年という人類の歴史から見れば、農耕はたかだか一万年の歴史を有するにすぎないことから、農耕の発明にはそれだけの身体的・精神的・文化的な成熟を待つ必要があったのだろう。故に農耕の中には、ヒトのヒトたる能力が凝縮されているとも言えよう。

だから農耕を行うには、ヒトをヒトたらしめている諸々の能力を駆使することが要求されるはずだ。そして農耕には、環境に働きかけてヒトにとって快適な環境を作り出すという側面がある。おそらくこの中にはヒトとしての自己実現の様々なプロセスがあるはずだ。それは園芸という、小さな家と庭と、個人または少数人数と、手の延長としてのわずかな道具と、ありきたりの栽培植物を基本にした営みでも実現できる。それは多額の投資と、高度な技術と、複雑な人間関係の中で達成される世俗的な成功とは異なり、つましくささやかなものであるが、本質的には何ら違いはない。しかしだからこそ今日の社会で大きな意味を持つのだと言える。これが多要素系としての園芸を、治療に応用する上での計り知れないメリットではないかと思う。

「バイオフィリアと園芸療法」

ここで多要素系としての園芸療法を離れて、「バイオフィリア」と呼ばれるヒトの傾向と園芸療法との関係

について考えてみたい。バイオフィリアはE.O.ウイルソンによって提唱された(バイオフィリア 平凡社)。彼によれば、この用語は「生命もしくは生命に似た過程に対して関心を抱く内的傾向」を指すものと定義している。また、彼は「生命に親しみ、探求するという営為は、精神の発達と深く関わる複雑なプロセスである」という。

この主張は、巷間に満ちている環境保護論とは次元を異にしている。彼は、生物に満ちた環境のなかで生き物に直接触れながら生きてゆくことこそが、精神の発達に必要なのだと主張するのである。言い換えれば、豊かな自然環境が失われ、生物に触れることのない生活は、ヒトの精神的発達にとって望ましくない状態であることになる。

もしウイルソンの主張するように、すべてのヒトがバイオフィリアという傾向を持つているならば、その傾向に十分配慮することこそが精神の発達に必要不可欠であるということになる。当然、療法の中にもこの点は考慮されねばならないだろう。しかしながら、医療のみならず、家庭教育・学校教育においてもバイオフィリアに対する配慮が十分であったとは言いがたい。この影響がいつ、どのような形で吹き出すのか？今、日本社会全体が壮大な実験場と化しているといっても過言ではないだろう。

医療に話を戻すが、バイオフィリアという傾向にもっとも配慮した療法は、園芸療法であると言って良いと思う。実際、今回視察した施設でも、間違いなくバイオフィリアに考慮したプログラムが存在していた。種を蒔き、植物を育て、花や収穫物を愛で、チョウを追いかけて、産卵や羽化を観察する。これをくだらない療法と一笑に付すことは決して出来ないし、あるいは「自然の癒し」と説明することも妥当ではない。身体が必須栄養素を必要とするように、ヒトの精神的発達にバイオフィリアという傾向を満たすことが必要であるという点について、医療機関は深く考慮すべきではないだろうか。

【北米東北部のTherapeutic Gardenの様式】

北米東北部のTherapeutic Gardenは、ヨーロッパの庭園やハーブ・ベジタブルガーデンの様式が基礎になっているようだ。特殊な目的に利用される庭だからといって、伝統を逸脱したものではなく、革新的な試みも全くといってないように思われる。石、テラコッタ、レンガ素材を多用した庭の骨格があつて、それに植物が植え込まれているといった感じが強い。その点でパティオ(中庭)がTherapeutic Gardenの基本形であるように思われる。パティオはフェンスや壁で守られた室外であるとともに、開かれた室内空間であるともいえる。歩きやすく、雑草管理も容易であり、外部と適度に隔てられているために安心感がある。園芸療法のための庭としては、外部から守られた空間であることが望ましいのだろう。それは同時に多くの人にとっても好ましいものであるはずだ。そして身体障害者や高齢者にとっては、室内から容易にアクセスできるバリアフリーの戸外空間であることが望ましいだろうし、急速に高齢化社会に移行している日本の各家庭でも大変有効であると思う。しかし高温多湿の風土では、通風の悪さ、夏場の縁石等の焼け込みが問題となるかもしれない。リハビリに多用されるレイズドベッドも、温室やハーブガーデンで多用されてきたもので、何ら特別なものではなかったが、障害者に配慮した改良は、障害者を持たない人間にとっても利用価値が高いと思われる。たとえば車椅子で作業がしやすいようにベッドの下に空きスペースがあるとか、レイズドベッドの縁に腰掛けがあるといった工夫は、一般家庭でも大変有効だと思った。

Therapeutic Gardenは、新しい庭作り、家作り、町作りの可能性を秘めていると思う。富の顕示としての家・庭づくりではなく、人が安らぐことの出来る空間、快適に戸外で過ごすための工夫、高齢者にも容易な庭園管理、緩衝空間としてのバルコニーや温室の活用、省エネルギー、ハウスシック対策を考えてゆく上で、Therapeutic Gardenは大いに参考になると思うし、研究成果が多方面に生かされてほしいと思う。

「景観と暮らし」

東アジアと北米東北部は、大陸東岸に位置し、モンスーン気候で四季の変化がはっきりしている。北米東北部の植生は、世界的にはきわめて限られた針広混交林であるが、東北日本も混交林であり、林相も似ている。気象条件が類似しているために、多くの北米東部原産の植物が日本に帰化しているし、日本原産の植物（クス、スイカズラなど）は北米で猛威を振るっている。ただし、構成している樹種は、東北日本の方が遙かに多様であるという印象を受けた。日本で優占しているササは見られなかった。

アメリカの景観でもっとも印象に残ったのは、川である。日本の河川と異なり勾配が緩く、比較的水量が一定しているためか、川幅いっぱいゆったりと水が流れ、両岸には水際まで河畔林が発達している。河川の護岸工事が行われていないため、自然のままの景観を良く残している。日本では、北海道の一部でしか見ることの出来ないものであり、これだけは心底うらやましいと思った。

人口密度は低く、家と家の距離が離れている。地方都市では、二〇〇㎡の庭は広くはない。日本で郊外の一戸建てといわれる住宅の10倍は広いことになる。隣家との境界線には塀や生け垣はないことが多い。庭はその多くが芝生で覆われ、数本の樹木がまばらに植栽されていることが多い。庭園に用いられる樹木の種類は限られている。それゆえとても広々とした印象を受ける。第一印象は何とも贅沢な生活よと、うらやましく思った。しかし毎日車窓から眺めているうちに、次第にマイナス面が気になりだした。

まず、植物の多様性に乏しい。どの庭を見ても、大差がない。だんだん物足りなさを感じるようになった。下生えも芝だけである。見た目には美しいが、裏を返せば何とも貧相な植生である。帰国後に知ったことだが、アメリカの家庭の芝生を維持するためにインド一国より多くのリン酸肥料を用い、世界のいかなる形の農業より多くの毒物（農薬）を投入しているという（パーマカルチャー、ビル・モリソン、農文協）。緑の絨毯は、

「沈黙の自然」なのだ。そして、庭には家庭菜園も花壇も果樹も少ない。非生産的な美しさと単調さが同居している。美しいことは認めつつも、そこでは暮らしたいとは思わない。なぜなら乱雑ではあるものの、生き物の気配が濃厚な世界に安らぎを感じるからだ。それが東南アジア的な感性と言えるかもしれない。

人口密度の低下は、必然的に移動距離の延長をもたらす。何か用を足すのにも、車で長時間移動する必要がある。かつての日本社会は、小さなコミュニティですべての生活必需品が調達できた。恐ろしい勢いで植物が生育する日本の夏。農業は雑草との戦いだ。けれども小さな菜園で家族が必要とする野菜をすべて調達できる生産性。里山の豊かな恵みは、人々が高密度で生活することを可能にした。広い庭と立派な家に住み、高速道を走ってスーパーやホームセンターに通う生活と、下駄履きで豆腐を買いに行ったり、裏口にご用聞きがくる生活とどちらが優れているといえるだろうか？ 巨大なスーパーで肉のかたまりを買って冷凍するより、町の小さな魚屋さんで新鮮な小アジやイワシを買う方が贅沢ではないか？ 老夫婦の経営するお惣菜屋さんがあったら、マクドナルドがあるよりいいではないか？ 今の日本にそんな小さな町が残っているならば、路地裏に小さな菜園付きの家を手に入れ、市井にひっそりと生きてゆくのも悪くはないと思うのだ。

無条件に北米の Therapeutic Garden を導入するのは、如何かと思う。私たちは東アジア気候区で生活している。私たちは、日本の自然と深く関わって生活してきた。その関わりを決して軽視してはいけないと思うのだ。私たちの精神は、深いところで日本の風土とつながっているはずだ。

園芸療法視察研修を終えて（寺内桂子：ケイコ）

【はじめに】

今回の園芸療法研修ツアーでは、広々として見るからに豊かそうなアメリカ東北部とカナダの旅が、日頃のちまちました日常を忘れさせてくれて、ずいぶんリフレッシュしました。最後の休日、ナイアガラ瀑布で遊覧船に乗り、滝壺でしぶきを浴びてひとしきり喚声をあげたのも一生の思い出になることと思います。滝の大きさに目が慣れてくると、逆にまわりを青や黄のそりのカッパを着込んだ人間たちが盛んに蠢いているのが小さく目に入ってきました。自分もカッパを着込んで船の上にながら、ただただ好奇心のみで集まっているのを感じている人間というものが、こんなにもかわいらしく思えたことはありません。こういう好奇心が人間の進化の原動力なんだろうなあ、と感心することしきりでした。滝を見て人間を知る。時々はこのように特に意味のなさそうな経験も必要ですね。

【ツアー全体のクオリティー】

旅行は大変有意義でした。全部で一〇カ所訪問しました。内容も見学、講義、実習、質疑応答など充実。皆さんの通訳のおかげで、ずいぶん込み入った内容まで理解することができました。

AHTA（アメリカ園芸療法協会）の一番下の資格「HT」の取得には、園芸療法の専門教育を受けたという認定ポイントが二点と、実務経験が一年以上必要。今回のツアーで〇・四五ポイント。ただし、ポイント登録料一一五ドル（約一万円）を支払わないと登録権が発生しない。

【日本とアメリカ/カナダの比較】

日本との比較という意味では、山根先生の各施設の訪問後の解説が大変参考になりました。

アメリカの園芸療法とひとことでもいってもバラエティーがあり、一概には言えないのですが、やはり医療機関で大変充実したプログラムをサービしているのが目を引きます。入院期間一週間から、よほど長くても一カ月というリハビリ病院や精神病院のなかで人気のある作業療法のメニューとして行われている、それも温室や療法用庭園つきのホールで行われているというのが日本では考えられないことでした。「これぞ極めつけの園芸療法」つい日本でも…、と考えがちになるのですが、落ち着いてコストのことを聞いてみると膨大で、すべての医療費が個人保険で賄われる「医療サービスも金次第」の国ならではの状況であり、また土地が余っている国のことであることがわかってきます。

入院患者の医療費が一日一〇万円というような精神科の病院を実際に見てきました。たとえ一日一〇万円でも、それで一週間で直してくれるのなら、日本のように安かろう悪かろうの医療で長くかかってこじらせるよりいいのでは？と、山根先生に聞いてみたら、それでも一週間でリハビリは絶対に不可能だ（急性期を落ち着かせるのが精一杯）とのことでした。ニューヨーク州、ペンシルベニア州、カナダのトロントというようなアメリカ東北部の地域は、アメリカやカナダでも有数の裕福な地域にあたります。

マネージド・ケアという制度では、これまで野放し状態だった個人の医療費を、保険会社がチェックして「この治療については払うが、これは払わない」といっいち病院に通告してくるそうです。「通告」といいたくなくなるほど保険会社側に主導権があるそうです。病院の経営側は、すべてを保険会社に握られてしまっているの頭が痛いとい異口同音に話していました。

「リハビリテーション病院での自立訓練に立ち会って」

リハビリテーション病院で術後の自立訓練を園芸療法でやっているところは、実際に見学して、患者さんと話をしたり物をつたりのお手伝いをしました。鉢の花の植え替えで、園芸スタッフが夏の間ゼラニウムが植わっていた鉢、パンジーのポット苗と土、移植などを作業用テーブルの上に用意します。患者さんは、作業療法士や理学療法士と一緒に車椅子でやってきます。そこで、ゴキゲンで植替えをするのですが、車椅子を少しテーブルよりほんの心持離して停めてあるので、患者さんはどうしても自然に立ち上がることになりません。そして、「パンジーは紫よりそちの黄色のほうがいいわ」「あなたたちは日本からわざわざ来たのか」「フィラデルフィアの町は見たか」など話をしながら、ゼラニウムを引き抜いて、鉢底ネットをおき、土をいれ、「パンジーは四つかしら三つかしら？」「三つでいいわね」と植え、土をならして、ジョウロで水遣りを行います。

一休みし、なんやかんや雑談。そのうち、園芸療法士が「もうひとつ植え替える？」と鉢を見せながら声をかけると、患者さんは鉢をみるとやる気ができて、また立ち上がります。二つ出来上がって、「ああ、こんなに長く立っていたのは初めてよ。誰か時間を計ってくれてたらよかつたのに！」なんて話していると、そこへ園芸療法士の助手が、ドーンと空の駄鉢を三つテーブルの上に…。患者さんは、「まあ！あんなにやれっていろいろ？私は雇われたわけじゃないのよ！」「園芸療法士は私達にやらせるだけやらせて何にもしてくれないわねえ！」ともちろん笑いながらいい、それ以上やりません。時間が来て、自分で植えたパンジーの鉢を庭にひっかけに行きます。「でも、こんな重たいもの持つて歩けないわよ」。そこで園芸療法士、「ただ車椅子のうゑで膝にしつかりもつていてくれたらいいのよ」。そこで、膝に二つ鉢を抱えた患者さんは車椅子を押されてすぐ横の庭園に出てゆきます。庭園内のあっちこちの柵の柱に空のリングが取り付けられているので、患者さんに「どれにひっかけたい？あっちにもあるわよ」と声をかけると、あそこがいいわ、と行ってそこまで車椅子

が押されて行きます。患者さんは車椅子のまま、目の前の高さのリングに簡単に鉢をひっかけてまわります。腕の力や腹筋の訓練になります。そのあと奥のほうまで花がいっぱい咲いて気持ちのよい庭を車椅子を押してもらって一回りして、ホールに戻ってきます。あとは、つれてきた作業療法士や理学療法士が患者さんへの質問を交えて評価票に記入してお終い。こんな感じでした。

温室のムラサキゴテンやトラディス・カンチアの挿し芽なんかもよくやるメニューのようでした。吊鉢から挿し穂を取るために立ち上がる、挿し芽をするために立ち上がる、吊鉢に寄せうえるために立ち上がる、吊鉢をつるために立ち上がる等々。土に触るのを嫌がる患者さんにはドライフラワーのアレンジメントや、押し花のしおり作りをしてもらっていました。

【Ponchoの「ティー・アップローチ」】

私が運営にたずさわっている園芸療法研究会西日本にとっては、ボディール・さんが主宰する NPO 活動 WAY TO GROW が参考になりそうです。ボディールさんは、アメリカでも稀な偉大なおっかさんタイプの七〇歳の女性で、見るからに「ドーンと来い！」という太っ腹な様子、生きるうえの知恵が豊富で何でも療法にしてしまう柔軟性、びしっと物を言う経験を経た厳しさなどを兼ね備えておられます。元看護婦ということで、大抵の相手に動じることのない印象をうけました。要するにボディールさんのキャラクターが並外れて療法的なんですね。こんな人はなかなか現れないけれども、現れたら廻りの人はかならず助けてもらえそうな気がしました。ただし、「事前アセスメント&事後評価」というようなものは整備されておらず、スタッフの（特にボディールさんの）直感で物事が進められているようでした。スライドによる紹介でも、エピソードが豊富であるにもかかわらず、治癒過程の分析が行われていないのには、山根先生も惜しいと話しておられました。

農学に強いコーネル大のバックアップで行われている活動も訪問しました。「4・Hクラブ」という農業地域の青少年育成政府助成 NPO の敷地にある UNLIMITED GARDEN (限界の存在しない庭) という名の園芸療法用ガーデンです。かなり重度の身体障害者、知的障害者、精神障害者が通っています。園芸療法士二人と日本人インターン一人で一度に六人くらいは平気のようでした。多い時には一〇人程も来るようです。このように重度の人を受け入れるにはやはり医療経験のあるスタッフが付き添う必要があるように感じました。日本で園芸療法士や作業療法士を雇えない公園やコミュニティでのボランティアによる展開について模索しているのだけれど、とボディールさんにアドバイスを求めたところ、軽い知的障害者に対するプログラムからスタートするのがよい、と話してくれました。軽い知的障害者ならボランティアでも充分に対応できる。そうこうして有名になって評判が高まれば、やがて雪達磨式に助成金が得られたり、それによってよい人材を雇えて、さらに難しいニーズのある利用者を受け入れることもできるようになることでした。新聞紙上で紹介してもらうなどメディアの力を借りて宣伝するのもとても大事なことですよ (このあたりは日本国内でも私もいろいろ経験してきましたからよくわかります)。UNLIMITED GARDEN の場合、コーネル大を通じて予算が振り分けられていて、利用料は一切取らないとのことですよ。

ボディールさんの右腕カレンさんが私達を、週末を楽しみにマンハッタンのほうから遊びに来た御両親とともに自宅のデイナー・パーティーに招待してくれました。それはそれは、大きな邸宅で (自分の庭におおきな池や林や牧草地もある)、どうしようもなく豊かなアメリカというものを印象付けられました。アメリカの国土の豊かさと資源のない小さな島国日本の対比は先の大戦で思い知らされたとはいえ、つい私達はこのような前提を忘れてしまいがちです。園芸療法についても、アメリカを参考にする場合に気をつける必要性を感じました。

「知的障害者のデイケアと老人ホーム」

知的障害者のデイケア Melmark ホームでは、ドライフラワーに焦点をすえたプログラムが完成されており、ドライフラワー用の切花栽培と、切花採集、乾燥工程とアレンジメント制作のそれぞれで利用者が作業を行っていました。多岐にわたって広がってしまいがちな園芸作業のなかから、ドライフラワーならドライフラワーと絞る込むのもプログラムの確立のためにも必要な考え方であるということを感じました。また、知的障害の方の作業しやすい畑のデザインや年間管理方法もおおいに参考になりました。

老人ホームに関しては、生き甲斐づくり、潤いのある環境作りに重点がおかれているようで、このあたりは日本の同じような施設が取り組みはじめているテーマと似たようなものを感じました。もちろん、ひとつのホームにいくつもの庭園が整備され専属の園芸療法士をかかえるなど、コンテナやプランターを職員やボランティアで増やして対応している日本の現状からみるとうらやましい限りではありません。

「精神障害者の自立支援」

私が個人的に興味がある精神面に障害や弱みをかかえる人のケアと社会的自立についても、今回の旅行は参考になりました。ニューヨークで訪問した民間の精神病院の場合、マネージド・ケア制度の影響もあって、成人の平均入院日数が七〜五日と短く、その短い入院日数の間に、病状の安定、投薬の適合性の確認、次の身のふり方のカウンセリングなどを行うとのことでした。ダンスセラピー、ロールプレイなどが併用されるようでした。うつ、分裂病、行動障害、摂食障害、情緒障害などが主な障害とのこと。また、カナダ有数のトロントの私立精神病院は、うつ、反応性うつ病、恐怖症、各種依存症、摂食障害を入院で、分裂病、老人性精神障害、痴呆、アルツハイマーをコミュニティのなかでケアしているとのことでした。入院日数は四週間〜数カ

月程度。レクリエーションセラピーや園芸療法を併用しています。ここでは、園芸療法は人気の高いプログラムだそうです。いずれにしても、日本でメンタルヘルス・ケアに対してまだまだ偏見があり、不調に悩んだ本人や家族が普通の病気の気持ちで気軽に訪れ、治療を受けることのできる医療施設はあまりありません。たとえ、高い自己負担であっても、本当に受けたい、こじらす前の集中的なケアのためには惜しくないと思います。自分で医療サービスを選べるチャンスがもっとあればいいのに、と思います。

また、今回の訪問地のひとつに、精神障害者の自助努力による自立を進める NPO がありました。アートを通した自立を支援するセンターで、立ち上げ当初は六〇万円ほどの年間予算だったのが、現在では助成金により三〇〇〇万円ほどの予算を毎年組むほどになったそうです。それというのも、政府がこのような活動を支援して自立を促すほうが、安上がりだということに気づいたからだそうです。実際に、元患者が社会復帰を果たし、ピア・カウンセラー（当事者によるカウンセリング）として、ソーシャルワーカーと同等の収入を得ているという人の話を聞くことができました。精神障害者といっても、自助努力や仲間の支えあいにより、ほとんど普通のひとと変わらない生活を送ることが可能なのだということを、新たに確認しました。

【おわりに】

さて、今回の旅行を通して、どうしても医療・福祉のことに疎い私としては、山根先生や菅さんのみならず、同行の作業療法士さんや看護婦さん、福祉関係の皆さんにいろいろ教えてもらえて大変得るところが多かたことを深く感謝いたします。また、植物のことを詳しく教えてくださった植物学の専門家、楽しい思い出を沢山くださったすべての皆さんに、この場を借りてお礼申し上げます。それから、あっちこっちで忘れ物をしてしまった私を許してください。皆さんどうも有難うございました。

新たな自信と確信の旅（腰原菊恵：キクちゃん）

【参加への想い】

今回の研修は、色々な事情が重なって参加したが、自分としてはこの研修会を通じて自分自身の「癒し」と「新しい発見」を求めていたような気がする。アメリカやカナダの園芸療法を知ることでもそうだが、まったく行ったことのない地へ行くことで、現在の自分自身の生活から離れ、今後自分が何をしたいのか、園芸療法を通して見えるアメリカとカナダの作業療法はどんなものなのか、日本の医療との違いはどのようなものか、など多くのものを発見し、考えるきっかけになればと考えていた。

【見学先での園芸療法について】

ウェイトウグロウでの高齢者に対しての話は、園芸療法を通して浮かび上がったアメリカでの高齢者に対してのシビアな考え方や対応ががとも印象に残った。また、園芸が様々な場で利用され、会社での生産性を高くし、不動産価値を上げるなどという視点からの話は興味深かったが、それがどうしてであるかの説明までしてほしかったというのが素直な感想である。

パウンドビューファームは、障害児をもつ両親が始めたということで、小さいながらも温かさを感じる場があった。入り口には可愛いツールペインティングの看板が立てかけられ、ズボンに反対にはいてネクタイをしていたかかしや、人がすっぽりとはいつてしまうサンフラワーーム、手作りのものが沢山詰まった道具置き場など、自然と手作りのものに囲まれ、様々な子ども達が園芸を通して、遊びや学習をしている様子が見えた。どこの世界でも子どものことを思って自分達にできることを精一杯やっている親はいて、その力はすこ

いなと改めて感じた。

アンリミテッドガーデンは、様々な工夫がされている庭で五感を通して楽しめた。ポディールさんの話は、温かさがにじみ出ていて本当に自然と人が好きな人なのだと感じた。ただ、お話の中で医学的知識がないことで効率的にできていない部分があるように思われ、もったいないと感じることもあった。また、ここでバスの運転手さんから聞いた4-Hプロジェクトの話は、アメリカでも若い人の農業への関心が低下しており、その対応を考えているということは驚きでもあった。そしてなによりも青空の下で食べたお昼は、楽しい体験であり（もちろんその前のスパーでの買い物も）、いい思い出になった。

フォーウィンズでは、一日に一〇〇ドルの入院費がかかるという話は驚いた。保険の関係もあるのか平均入院日数が短く、精神分裂病のようなじつくりと治療をする必要のある人はこの対象にはならない（なれない）という説明は納得した。また、対象の多くを占めている子どももじつくりと時間をかけた治療が必要であるし、本当に必要な治療が行われているのだろうかと心配にもなった。

メンタルヘルスセンターは、当事者の方々の話を聞く貴重な機会であった。仕事に就きたくてもなかなか就けないという点は日本と同じであるが、修士や博士を目指す前向きな姿勢は、日本ではあまり聞かれないことであつた。具合が悪くなったときに、入院したくてもなかなか入院できない状況もあるようなので、この場のような誰でも気軽に立ち寄れる場合は本当に重要な役割を果たす場であると感じた。アメリカ政府がピア活動にお金をかけることの方が負担が少なくと気づいて力を入れたように、日本でも地域生活支援センターなどが様々な地域にできるように政府に働きかけていくことが必要だと感じた。その第一歩として、今自分が関わっている生活支援センターや授産施設の活動をまとめていくことの大切さを改めて感じた。

プリンモアリアハビリテーション病院では、初めてアメリカの作業療法士の仕事を見ることができた。園芸の

グループ活動（四名）に入らせてもらった。共に活動をしながらかわっている場面も見られたが、患者と話をしている中でカルテを書いている姿はなじまないものがあつた。また、私たちが見学することで、病院の上の人たちに園芸活動の大切さを知ってもらおうとしている園芸療法士の姿は、日本の様子と大差がないように感じた。

ロングウッドガーデンは、広すぎて途中で疲れてしまった。珍しい植物を見られたことは楽しかったが、あまりにも作られ過ぎて自然が痛々しかった。日本と自然に対しての考え方が違うようであり、日本のように自然美を生かして整えたり、形を作ったりする感覚とは違うことを改めて感じた。

メルマークホームでは、知り合った子ども達も明るく快く私たちを出迎えてくれたことに感激した。各々が自分のしている作業に自信を持って取り組み、見本を見せてくれたり、ハンドベルを演奏してくれた時の表情はとても印象的であつた。作業自体も工夫され、その子に合わせて段階づけがされていて、授産施設で利用できるような作業もあり、とても参考になった。施設全体が利用者のことを一番に考える姿勢は本来あるべき姿であり、日本も今後そうなっていくであろうと感じた。

パークレイフレンズホームでは、施設が完備されており、家庭を感じさせる建物を建てたとのことであつたが、私には立派すぎて家庭と言うよりもホテルという印象であつた。ただ、所々に緑が飾られており、和やかな印象は感じた。加えて、かなりの寄付がされているようであつたが、その人々の名前がさりげなくステンドグラスの中に書かれていて、日本とのセンスの違いを感じた。

ホームウッドヘルスセンターは民間の精神病院とのことであつたが、敷地が広く、歴史のある建物があり、施設内が充実しており、日本の民間の病院との違いに驚いた。園芸療法の活動の場も充実しており、病院で力を入れている活動であることは分かった。実際にセッションを体験させてもらったことは、とても貴重で楽し

い経験であり、ミツチエルさんが日頃から色々と工夫しながら園芸活動をしていることが伺えた。作業療法とは連携していないとのことであったが、なぜ作業療法士とチームを組んでいないのか、医療点数の対象とならなくてもやっていけるからなのか、治療目標の確認等はされているのだろうかといくつか疑問が残った。セントジョセフ病院の雨の中で見た庭は隅々まで手入れがされていたが、活動する場というよりは、鑑賞する場と感じた。園芸活動はレクリエーションプログラムの中に含まれており、環境療法的意味合いでの効果をねらっているという点は納得できた。

どの施設においても園芸療法士や園芸療法に携わっている人たちが、熱心に取り組んでいる姿が伺えた。その点は、日本と同じで本当に園芸や植物が好きでなければ続けない状況（医療点数の対象とならないこともあり）があるように感じ取れた。ただ、熱心ではあるけれど養成システムのなかに医学的な知識に関わるものにかけているため、より治療的な働きができていないのではないかと、治療的な関わりができていてもそれをひとに伝えられないのではないかと、ということが気になった。今後は、園芸療法としてお金をいただくのであれば、教育（養成）システムをどうするのか、他職種との連携システムをどうしていくかを考えていかなければならないと思われる。

また、どの施設においてもボランティアの存在は大きく、ボランティアする側とされる側の両者にとつてよい形で利用がされていた。日本もボランティアにうまく協力してもらえようシステム作りをしていくことで、より効率的な働きかけができるのではないかと感じた。同時に、カナダの園芸学校のように、本当に園芸の勉強をしたいと考えている人に様々な場を提供し、管理をしてもらいながら勉強することも効率的であり、なかなか日本では出てこない発想であるが、見習うべき点と思われる。

今回見学した施設は、おそらくある程度金銭的に余裕のある人が行く病院や施設だったように思う。そのような施設でなければ、園芸療法は取り入れられていないのかどうかは分からなかったが、さまざまな場で利用されるには、園芸療法の効果を人に伝えられるようにしていかなければならないと思う。

「アメリカと日本の違いについて」

アメリカは、保険が適応されるかされないかで治療内容が決まるということであり、患者さんの評価もそのためにされることを聞き、日本との大きな違いを感じた。

生活面においては、スーパーは日本と規模が違い、一つのもが大きかったり大量に入っていたり、あまり手かけないで食べられるものが多く、買っていく人も大量なものを一度に買っているなどの合理性を重視しているように思われた。食べ物に対する味つけでは、甘いかしょっぱいかと極端であり、日本のような微妙な味付けというものには出会えなかった。空港や街にいる人の体格の良さにも驚いた（日本の体格のいい人はアメリカに来たら小さく見えてしまうなどと思うほど）。このように、背景になるもののがかなり日本と違っており、人も（考え方も）違うのだから園芸療法も（もちろん作業療法もそうだと思うが）外国のものをそのまま取り入れるのではなく、日本に住んでいる人や植物、環境、文化に合うように考えなくてはならないと感じた。

「作業療法との関連」

園芸療法に対しを作業療法で治療費が払われているということもあつてか、作業療法士が対象者の治療目的を指示して、実際する活動内容は園芸療法士が決めていた。ただ、作業療法士が対象者の話を聞いてカルテを書いている、対象者の反応を十分見ていなかったこともあるので、園芸療法士と一緒に作業をしながら評価を

すっかりとし、それをしっかりと作業療法士に伝えたり、自分で判断して修正することが必要になると思われた。また、グループはその力動の利用というよりは、効率を図るために集団でしているという印象を受けた。私としては、両者が連携して行うことはとても意味があることだと思われ、今後は日本でも両者が連携しながら行われていく場が増えると思うので、どのような役割分担をしていくかは大切なことだと考えている。

「グループ活動について」

今回の研修会には本当に様々な年齢層、職種、個性の人たちが集まって、色々な刺激を受けたし、本当に楽しく研修を過ごすことができた。「園芸」というキーワードで集まった人たちは本当に自然体で、暖かい人たちであった。アメリカとカナダの園芸療法を知り学ぶことが目的であったが（もちろんそれ以外にも色々な目的があったが）、それ以上に温かい人々に触れ共に行動できたことが大きな収穫であった。

「最後②」

研修会の目的であった自分自身の癒しという点では、ナイアガラの滝を五感で感じ何とも言えない感動を覚え、暖かい人々と出会い、行動を共にし、十分癒される体験ができた。

作業療法に関しては、アメリカやカナダの生活と園芸療法も見えて、日本の歴史、文化、環境を十分に考え、大切にしながら、作業療法を考えて行かなくてはならないと改めて感じた。そして、今自分がしていることに自信を持っていいことを確信し、さらに今回の研修で感じたことを胸に、日本の生活や臨床をベースにして色々と学んでいきたいと思います。そう気付かせてくれた園芸療法や、アメリカやカナダの大自然、旅であった仲間達に感謝の気持ちでいっぱいである。

ぼんやりと感じる方向性（森田美穂：ミホ）

「パウンドビューフアーム（知的障害児施設）」

パウンドビューフアームは森やとうもろこし畑の中にぼつんとある庭です。設立者のピバーさんが、知的障害のある息子さんが大人になって、周りの人がいなくなったときにも、人の手を借りずになんらかの活動ができるようにと作った知的障害者のための庭です。週に三回いろいろな園芸活動ができるようになっていきます。ここで彼等は植物の栽培を通して、作業をすることの意味を知り、仲間を作り自信を得ることができます。ここには、知的障害児やボランティアの人たちだけでなく、地域の子供や大人たちも訪れます。普段接する機会の少ない知的障害者と一緒の時を共有することで、同じ人間として理解を深めることができます。学校の授業についていけずに、学ぶ機会が少なくなってしまう知的障害者にとって、この庭は貴重な学校にもなります。植え鉢の形、野菜の形など、庭自体がいろいろな形のもので構成されており、形の認知力が乏しい子供に対して、楽しく学べるように工夫されています。庭に出て、丸いものを探したり四角いものを探したり、色の名前を覚えたり天気について学びます。

この庭を使うのは無料で、国や週からの助成金は一切受けていません。助成金を受けることによって庭の大きさやプログラムなどに対して規制が入る恐れがあり、子供の自由を奪うことにつながるからです。この庭の運営金は、ピバーさんが息子さんをつれて寄付金を募りに出かけて得ます。

「アンリミテッドガーデン（総合的園芸療法のガーデン）」

ここでは、設計のポイントについてのレクチャーが受けました。入り口は、広く、誰でも受け入れるような

形に作られています。そして、外からも中の楽しそうな何かが見えるようにしています。周りは囲われていますが、これは中での作業をスムーズに行うためにはとても大切なことで、庭全体を安全な場と感じます。ただし圧迫感のない素材や高さを考えることが必要とのことでした。そしてランドマーク、つまり目印となるものを作ります。認知力が劣る知的障害者や小さな子供が、迷子になったり、言われた場所がわからなくならないようにするためです。ここでは、大きな噴水付きの円形花壇がランドマークでした。花壇は、高さが様々に設定されています。車椅子の人、背の低い人高い人、背中をまげれない人など様々な人が集うからです。これらの花壇のことをレイズドベット（持ち上げられた花壇）といいます。また、この庭では様々な植物が選ばれています。庭においても嗅覚を刺激する香りの庭や、さわるとふわふわしたものや固いもの、柔らかいものが置いてある触覚の庭、色鮮やかなものを置いてある色彩の庭、野菜などが植えられる味覚の庭など様々です。もちろん植物を選ぶ際には毒がないもので、手を傷つけないものを選ばなくてはなりません。

この庭の通路は広くとられています。車椅子の人と介護の人が一緒に回ることも想定されています。また通路は行き止まりを作らないように注意されています。自由に身体が動かない人のフラストレーションを引き起こしたり、知的障害者をパニックに陥らせる可能性があるからです。

どんな人達がガーデンを使うのか、どんな目的を持たせるのか、お金はどうやって得るのか、地域の中でのそのガーデンの位置関係などしっかりと把握し、設計士や病院関係者、地域の人の意見を取り入れつつ完成していく必要があることを感じました。

「プリンモアリハビリテーション病院」

一四〇床の、身体障害を対象としたリハビリテーション専門の病院です。園芸療法の作業は一つのテーブル

で行われ、患者を混乱させないように一つの机にすべてを載せ、作業をスムーズにしています。患者によっては、花は好きでも土に触りたくない人もいます。その人のために、押し花やドライフラワーのプログラムも用意されています。できあがった寄せ植えや花束は、売店で売られますが、欲しいと言えば病室のまくらもとに置かせてもらえます。患者は化粧をされ、ドレスアップした美しいお年寄り達ばかりでした。スタッフも私服で患者とスタッフの垣根が低いように感じました。

病院の中には、入院患者が書かれた絵も飾られています。四肢麻痺という、手足が動かない人が口で書いたものですが、病院内にこの絵を飾り、作者の病歴についてコメントをつけることで、同じような状況の他の患者を励ますこととなります。

「メルマークホーム（知的障害者施設）」

ここでは障害者とスタッフが当たり前のように生産をし、働くことに焦点が当てられています。園芸療法やクラフトによる作業療法が取り入れられています。掃除や料理、庭の手入れも全て入所者が行います。

出来上がった作品は、施設内の販売所や地域のバザーなどで売られ、入所者の給料になります。給料日は必ず月に一度やってきます。こうして社会の仕組みを学んだり、自分も社会の一員である自覚を養っています。園芸療法の庭で栽培されていたのは、ほとんどがドライフラワーを作るための花と、食事用の野菜でした。（通路の舗装を区別してあり、メインロードにはウッドチップが敷き詰められ、右の横の通路は藁、左の通路は砂利になっています。障害者は、自分がどこにいるのかはつきりわかり、一人でも作業しやすいためにされている工夫でした。他に、アニマルセラピーがあり、馬とロバを使って乗馬が行われています。動物の世話はもちろん障害者の仕事です。

帰り際にハンドベルを用いた演奏をしてくれました。指揮者の合図にあわせておのおの自分のベルをならし、音を作ります。演奏が始まる前は、お互いに「大丈夫、落ち着いて」と声を掛け合い、終わったなら成功を祝って握手とハグの嵐になります。とてもすばらしい演奏でした。

〔ホームウッドヘルスセンター（精神障害者施設）〕

カナダ唯一の私立の精神病院で、設備もスタッフも整っていました。病床は三〇〇程度ですが、スタッフはなんと六〇〇人、ボランティアが三〇〇人ということでした。私立であるために、様々な試みが行われており、図書館があり、喫茶店とレストランがあり教会もあります。患者の金銭的負担がかかるようにも見えますが、カナダでは入院費のほとんどが国から支給されるそうです。

患者のタイプによって、治療のプログラムは異なっていました。例えば依存症の患者（アルコール・ドラッグ・競馬やパチンコを含むギャンブル・恋愛に関する依存症など）は、主に散策を行います。木の話やこの施設の歴史や、たわいのない会話をします。症状については触れない約束が患者とされており、前向きなことに焦点を当てていました。約一カ月の入院期間しかないのです。薬による治療と共に生活を豊かにし、新しいライフスタイルを確立することを目的としています。

セラピューティックガーデンは、この庭に来ることが病室からの開放を意味します。そのためスタッフは、患者をリラクセスさせる工夫をします。スタッフがいらいらしていると患者の回復を遅らせてしまうので、問題のあるスタッフはプログラムから外されます。拒食症や過食症といった摂食障害の人には「適度」という感覚を覚えるために使われていました。例えばみんなで作業するときの早さや、自然の食べ物の味の感覚などです。このような症状の人には完璧性の人が多いそうです。

またこの庭はトラウマを持つ患者にも使われています。戦争やレイプ、家族間の暴力によって心が傷付いた人たちは、なかなかその出来事から離れることが出来ずに苦しみます。そのような人たちのガーデンの利用の一つとして、過去に起こった出来事やそのときの感情を全て紙に書き出し、土に埋めます。その上に種を撒き、水をやります。そうして過去と現在の区別をつけて、芽が出て花が咲くといった未来のことを楽しみに待つことができるようになるそうです。

〔園芸療法視察研修会に参加して〕

私は設計事務所を相手に緑化資材をうりこむ営業を行う毎日ですが、そんななかで病院や老人福祉施設に緑を取り込むコンセプトを掲げた物件によく出会います。福祉を見据えた建築物の設計と、緑に関するむすびつきに何かを期待し、求めていることが伺えます。しかし、積極的に緑を取り込んだ施設が必ずしも成功するわけではなく、管理の問題を抱えたり、意図した機能を果たさずにお金だけがかかることも多く、失望を感じて緑を再び敬遠してしまう設計士がいます。これは、医療の現場にいない私たちメーカーや設計士の人間が、患者さんや介護をする人の立場で、どこに、どのような緑を施設に持ち込むのが理想なのか、限られた予算の中で最もいい方法はなにか、を模索したところで、想像の域を出ないことが原因だろうと思いました。そこで、私は一度見に行こうと思ひ立ち、今回の研修に参加しました。

なにしろ、知識がないので見ることが新しく、希望に満ちたものでした。たとえば、福祉の充実なしに未来がないということは新聞やテレビで見聞きしているにもかかわらず、実際の高齢者が抱えている問題が何なのかを知りませんでした。老人に対する接し方で回避できる問題がどれほどあるのかなどは設計の立場でなくても、日常生活の中で知っておかなければならないことで、今まで知らなかったこと自体驚きでもあり

ました。日本で二〇%近くいるはずの高齢者に関わらないで生きているということに、いかに、都会で働くサラリーマンが偏った世界で生きているか、ということにも気づきました。

最も印象深く感じたのは、精神障害者たちの自助組織やピアの制度で、人間のもろさとタフさを思い知らされたような気がします。私や私の周りの人たちには、精神に障害を得るのは弱い人たちで、生まれつきであり治るものではないというイメージが強くなります。しかし、精神障害は誰にでもかかる可能性があり、一度病気になるかかったとして、治るまではいかないまでも、様々な可能性をもっているという印象を強くもちました。そのことには、高齢者の場合と同じく、周りがどう接するのが強く関わっています。

私は、当初設計を行う、もしくは設計士に伝える上で必要な、技術的な工夫を学ぶ予定で参加しましたが、マニュアルのようなものは作れないという結果を得ました。患者・医師・療法士・設計士・家族・地域の人たち、余りにも多くの要因が関わり、患者一人一人自体が違うために、本当につかえる庭を作ろうとしたとき、一つの側面からの判断を行うわけにはいきません。どうしても、設計図面を書く必要があるれば、より可能性を残したものにすることが最もよいのかもしれませんが。

今回の研修で私は一〇日間の日程とは思えないほど、福祉の現状・問題・希望に関するたくさんの方のキーワードを得ました。しかし、この先メーカーの営業として具体的に何をすればいいのか、一人の人間として周りの人たちや自分のために何ができるのか、見えてこないのが現状です。ぼんやりと感じるのは、得た知識とこれからのいろいろと経験することが一つの方向性をもたらしてくれるということです。少しずつですが形を作っていければいいと思います。

広い大地と豊かな森で（屋良節子：フチヨーまたはセツコサン）

九月八日、成田を立つ時刻に沖縄は台風一四号のニュースが流れた。その後日、一五号が発生、連続台風に見舞われたらしい。沖縄が悪天候の中シカゴ行きは好天気に見舞われ無事、現地時間一一時三〇分に到着した。シカゴは街を見ることなく、なんと一〇間の日程の間三回も乗り継ぎで利用している。おかげでシカゴ空港内は知りつくしたという感じだった。

今回の園芸療法視察研修ツアーには、日程にカナダの地がすぐ目に入り、カナダといえば豊かな森を想像し、自分自身の癒しの旅にと云うのが本音の気持ちだった。大自然に育まれた緑豊かな森、それはかつて私の故郷にも存在し、山、川、森、海と自然とのふれあいがたくさんあった。

最近では、都市化が進み、街はアスファルトで固められ、森はゴルフ場に変わり自然とのふれあいも遠のいてきた。そのような中で、緑や植物に関する園芸活動を利用しての身体的、精神的治療をおこなう園芸療法が近年とみに話題となっている。当院も開院当初より自然との融和をはかる「やすらぎの場」としての環境作りに、植栽と園芸活動を続けてきた。そのような医療現場にいる者として園芸療法に興味を抱いたのも今回の参加理由のひとつである。

さて、実際に園芸療法を実践している知的障害者施設や精神障害者施設、リハビリテーション病院、老人保健施設等を見学して感じたことは、施設において園芸療法をおこなっていく困難（経済的）さと、目的途中の段階のように見受けられた。しかし、アンリミテッドガーデンとメルマークホームの農場は予算をかけた様子でもなく、障害者に対応した工夫がこらされ、スタッフの優しさが農場に漂い、とても参考になった。また、Art Of Healingとして精神障害者の自助グループのギャラリーを見学できたのも今回の収穫だった。

スタディーツアーには初めての参加でしたが、スケジュールの面で移動の多さにハードな感じもした。しかし、目的地であるオールバニー、フィラデルフィア、カナダの広大な地と豊かな緑は想像していた通りであり、また映画を見ているような、湖と深い森に囲まれた白亜の館での一時もステキな思い出となった。重ねて最も印象に残った思い出は、一〇日間一緒に過ごした、楽しく愉快な一人の仲間である。

帰沖後、沖繩は回りの木々や花々に、台風爪跡が残っていたが、数日には逞しく生き生きと蘇りつつあり、ほっとしている。

緑を愛する仲間の皆さん、お元気で、再会を楽しみにしています。

次はフロリダへと夢馳せる(嶺井 毅：ツヨシ)

園芸療法のスタディーツアーには二度参加させていただきましたが、それぞれに違った内容で勉強になりました。今回のツアーで一番印象に残っているのは、アンリミテッドガーデンとパウンドビューファームです。両方とも今後のいずみ病院でのガーデン設計に大変役に立ちそうです。既に精神科の方では土作りを終え、野菜や花をどのような配置で植えていくのかを、患者さんと一緒に話し合っているところです。

というところにも心が燃えているようですが、幸か不幸か、実はツアー中に沖繩は台風襲来にあい、病院のガーデンは見るも無残な姿になっていたのです。にがうりの棚は倒壊、他の野菜はもの見事にアフリカマイマイに食われていました。農機具の保管庫にはねずみが避難していて、戸を開けたとたんになどと飛び出てくるし、籠の中では二度目の出産か、ツルツルのこねずみが8匹もぞと動いていたのです。患者さ

らと一緒に片付けをしながら、「これもいい機会だから耕運機をいれてもらおうか？」と授産施設のスタッフに依頼し、一緒に整備をしたのでした。

雪や霜の被害とは無縁の台風銀座沖繩ですから、個人的には今後スタディーツアーに参加するとすれば、気候的に近いフロリダやジョージアなどの南部の州に行きたいと思えます。植物を扱う以上、気候は大変重要なファクターであることは間違いありません。

さてツアーの印象ですが、何となく園芸療法の概念が少しずつではありますが見えてきたかな、といったところで。幾つかの施設を見学させてもらって、対象者は異なりますがハード面においてどのように自分の職場に応用していけばよいのかが何となく見えてきました。また、医療制度の違いはあるにせよ、園芸療法士の臨床での姿を直接みさせていただきました。今の自分自身のやっていることは、方向性としては間違っていないことを再確認することができました。病院に勤務する者として、アトラクティブな魅力あるガーデン作りをめざしながらも、患者さんのニーズ、目的にあった園芸プログラムを提供できればと思っています。

睡魔と戦ったハードツアー(伊藤孝子：タカコ)

今回のスタディーツアーには、当院で園芸療法の庭を設計するにあたり、なにか参考になればと思います。私にとっての一〇日間は、かなりハードスケジュールであり、睡魔との戦いでした。その中で色々な職種の方と出会い、私の知らない世界を少し見ることができました。

私にとっての一〇日間は、かなりハードスケジュールであり、睡魔との戦いでした。その中で色々な職種の方と出会い、私の知らない世界を少し見ることができました。

今回のスタディツアーでは、主に庭を見るだけで終わってしまったのが残念です。園芸療法の施設がどのような目的でどのように作られたのかが知りたかった。私は、作業療法士なので園芸という作業をもちいてかわることに、どのような治療効果があり、その効果が生活面にどう影響しているのか、より具体的に知りたかった。園去療法士がどのような教育システムで学んできたのか、少し事前に調べて参加すればよかったように思います。

大変ハードな旅でしたが、色々な経験をして、とてもすてきな庭を見ることができ、楽しい日々を送ることができました。ありがとうございました。

目指した道の確認（尾家康夫：オーイー）

知的障害がある人たちの施設を運営していて、植物、園芸と出会い、それが彼らの生活に大きな意味を持つと感じ、それを何とか彼らの生活に生かせないだろうかと試みを始めていた。ああすればいいのではないか、こうしてはどうだろうかと試行錯誤していたものが、今回のツアーで、「ああまちがいはなかった」と確信した。

ツアーはもつとゆく利のんびり見学できるものと思っていたが、夜遅くから朝早く、大変でした。遊ぶ間もなく、苦手なレクチャーが続き、疲れました。でも、いろいろな人とあひ、まるで異業種間交流のような旅でした。

そのせいか、自分の都合でフィラデルフィアでみんなと別れ、ホテルに帰ると急に不安になりました。翌日

フィラデルフィアから成田まで、乗り継ぎを含めて一八時間、ひとりぼっちの旅は寂しかった。一七日には、閑散と合流し諏訪の病院や活動を見てまわり、九州に帰ったのは三日後でした。

この旅の体験で確信したことを、実現しようと思っています。

（聞き書きヒロボー）

旅日誌付録

甲賀の山里に植物と棲むハカセが、旅の途中で口にした松本ギャグ（オヤジギャグ高品位亜種カナダ型）をニューカントリーが密かに採取、税関の目をくぐって持ち帰ったので紹介します。

↓ナイアガラへ向かうバス、ガイドの説明「この辺の洋ナシは、採る人がいないので木の下にポタポタ落ちています」に――「これがほんとの用無し」

↓カナダは、道路表示の時速、距離はフランス統治のかかわりでキロメートル――「マイルでは参るな」

↓このカナダ硬貨は、エリザベス偽？――「いいえ、本物のエリザベス二世」

↓ナイアガラ滝落下を実行した冒険家がこれまで一四人います。亀と一緒に樽に入って落下した人は残念ながら死亡。亀は生きていた――「おおカメ（神）よ」「カメへん、カメへん」（二つ目はヒロボー作）

↓トロント市内の東洋の骨董やで、この「インセンス」って何？――「これはあなたです先公（線香）」

↓トロント地下鉄駅の路線図を見ながら、どこで降りればいいのか？――「よく見る（ヨークミル駅）」



園芸療法旅日誌－園芸療法研修ツアー番外編

2000年10月 初版発行

著者 山根 寛

発行所 京都市伏見区桃山町養斉1-1-501

印刷 Yamane print



ケイコ



セツコサン



ハカセ



タカコ



オーイーと僕



ツヨシ



ミホ



ヒロボー



ニューカントリー



ユミコとキクちゃん